終わった後に…

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わった後に…

【Ｎコード】
Ｎ２０５６Ｅ

【作者名】
佳生

【あらすじ】
両目をえぐられて死ぬ。それは、見てしまったものだけに訪れる、死神の呪いだった。

ぜろ　：　プロローグでエピローグ

もう何も見えなかった。自分が生きていると言うことにすら驚いていたし、何より、結構な余裕で携帯を手にしているのも……笑えた。

「もしもし、先生？」

自分の頬を伝う暖かいもの。それは溢れ、どうしても止められない。

『どこにいるの！？』

あぁ、先生だ。アイツが好きだ好きだ言ってた先生の声だ。

随分、久々に聞いた。気がする。

「どこですかね、分からないです……うっ」

どすん、と体の中で何かが爆発した。重い衝撃があっただけで、特に痛みがない。取り合えず、それは体の中からだった。

『大丈夫なの、真哉くん！？』

「大丈夫かと言われたら今のところは」

『それで、今はどこなのよ、何か見えないの！？』

「何にも…見えないですよ……あ、ちょっと、マズイ」

何か有り得ない音が。

『……真哉くん、まさか』

「助けには、来なくていいです。ていうか、無理だと」

『……！』

電話の向こうで、先生がどんな顔をしてるのか分かる。

でも、無理だ。

それは、僕と奴との絶対の約束。僕は一番望まない死様を与えられる代わりに、妹とその未来を守る。

体の中。一つずつ、苦しみの少ないパーツから順番に破壊されて行く。ただ、皮膚と筋肉の内側で、別々だったものが一つに混ぜら

れていく感覚だけが不気味だ。

多分、痛すぎて、痛みと痛みが相殺される様な状況になっている
に違いない。人間の脳は実に便利につくられている。

『真哉先輩！！』

「あぁ、幹手か……ごめんな、右目」

『……あ、そんなっ！！』

妹の為に、無駄に失ってしまった彼の右目。

「本当にごめん。でも、仮は返したよ。……それて妹、頼むな」

『先輩！？　ちょ、諦めないで！』

諦めないで。この状態で言うのか。

確かに向こうからすればそうだろうけど、僕としては諦めはない。
どっちかというと、潔いと思える。

他に、方法はない。あったとしても、僕には見付けられなかった
し、もう遅いんだ。僕は約束してしまった。

「ごめん、切るよ。もう、あんまり聞こえない」

冷や汗が出るくらい、結構辛い。目は見えないし、少しずつ耳もおかしくなってくる。

息も苦しい。

『お兄ちゃん！！』

「！」

真沙……。

『お兄ちゃん、お兄ちゃんっ！！』

「最期に聞けるとは思ってなかった」

『お兄ちゃん！』

呼び掛けるしか出来ないから、一生懸命に叫んでる。

「ごめん。真沙、切る」

『待って、お兄ちゃん！』

「駄目だよ、待てない。切る……ちゃんと、しろよ。じゃぁね」

お兄ちゃん。

多分、切るまでそう言ってたはずだ。もう聞こえない。

携帯を投げ捨る。出来るだけ遠くへ。もし、ボタンを押し切れてなかったら。……こんな情けない声は聞かせられない。

「が……あぁあぁぁぁっ！！」

のた打ち回っても、当たる壁はない。

目は当の昔、一番始めに潰されているし、足の自由はすでに無い。中から刻まれ、混ぜられるなんて拷問は、今まで受けられるはずもなく、いくら僕でも耐えられない。

でも、仕様がないんだ。

「かはっ、あ゛」

それで、妹が生きてられるなら。

「……、…」

僕は真っ暗闇の中、何の音も聞こえない状況で、血ヘどを吐きながら、少しずつ、少しずつ、死んでいった。

気を失う事はなく、静かに確実に自分がいなくなって、死んで行くのを感じていた。暖かさも、鼓動も、体の全ても、痛みすらも。そうやって僕は、溶けるように消えて行く。

最期に感じたのは多分、心臓が潰れて、脳が溶け出した瞬間だったと思う。

でも、これは、僕の思う最悪じゃぁない。死様としては最悪だけど……僕の最悪は。

結末を知って尚、それを変えられないこと。

だから僕は、結局のところ、死を持ってしても、最大の苦痛は、得られなかった。

残念だけど、僕は全然、苦しくなかったよ。死神さん。

.

いち　：　ＤＶＤ

それは、どこから来たのか。

「ほ、ホラー？　マーちゃん、見るの……？」

「うん！　でもね、一人で見るのは怖いからー、お兄ちゃんと！」

それは、誰からともなく回ってきた、ホラー映画のＤＶＤ。

季節が夏であり、マーちゃんこと、湖都原真沙（ことはら まさ）と幹手永士（みきた ようじ）が、映画同好会のメンバーだった事を考えれば、さして疑問はない。

現にＤＶＤは先輩たちから回ってきたのだ。

「先輩達が言うには、面白いって！」

「ぼ、僕、ホラーは見ないよ……怖いし、手元に置いておきたくないから」

厳重に袋に包まれ、更に袋、その上紙袋に入れられているのをみる限り、相当怖いらしいそれ。

「良いわねぇ、先生にもかしてよ」

「えっ、先生も見るんですか！？」

廊下で話していた二人に、映画同好会の一応の顧問となっている、田等薙葉奏（たらなぎ はかな）が声をかける。

振り返った永士は、引きつった笑みで紙袋を指差す。彼は本当にホラー系が駄目なのだ。祭りの時に設置される、陳腐なお化け屋敷ですら、入るのを難くなに拒むほどに。

「やっぱり夏って言ったらホラーじゃない？　ねぇ」

「ですよね！」

意気投合している二人に、苦笑している永士の後ろで、部室の戸が開く。

出てきたのは、今日、唯一出てきた二年上の先輩、派佐田日当（はさた ひなた）だった。疲れた様子で出てきた彼を、葉奏が怪訝そうな表情でみやる。

「……日当くん、どうしたの？」

映画同好会。そんなに疲れるような事をする訳がない。しかし。

「……ちょっと、ハードで。うっぷ」

「何を見たんですか」

「えっと、“デス・ウォー”ってやつ。ぶっ飛んだり、弾けたり、溶かしたり、潰したりするやつ。人と怪物の……ていうか、リアル過ぎだよ」

想像したくない。

「先輩、よく見てますよね、その……ハードな感じの」

「うん、まぁ。吐きそう……！」

と、廊下を駆けていった日当を見送りながら、永士が、その場にいた全員が思ったことを言った。

「だったら、見なきゃいいのに」

「途中でやめればいいのにね……」

吐くまで行くなら見ない方が、身と心のためだ。

「はっかな先生！　今日も綺麗っすね！」

「うわっ！！」

心配そうに日当が走っていった廊下に目をやっていた葉奏の背後の窓ガラスが急に開き、そこからニョコッと、誰かが顔を出した。

一階であるから、やろうと思えば出来るが、平均的身長の人間には、少々きついものがある。よって、この青年は、並の学生よりも身長がある。

片手にスコップ、片手に向日葵の花束。

「プレゼント・フォー・ユー！　受け取ってくれ、先生！！」

「相喜！！　いきなりなんですか！！」

「なんですかって……なんでしょうね」

取り合えず、向日葵は受け取って、葉奏はその青年に言う。

彼は花祭相喜（かさい あいき）。この高校を卒業すると同時に、ここの事務員になった、いわばエリート。事務員ごときでと思うかもしれないが、彼は高校時代に、三十以上の資格を手にして、内四つは国家試験と言う、極めて異例な生徒だ。

普通なら、学校の事務員と言う位置付けもおかしい。

「職員室に行こうとしたら先生見えたんで。つか、そんな顔しなくたっていいじゃないっすか」

相喜は八年前にここを卒業した、葉奏が初めて卒業させた生徒。その頃から、彼は変わらず、葉奏を先生と呼んで、アタックを繰り返している。

新任だった葉奏と、出会った時の相喜の年の差は、四歳。完全に相喜の一目惚れだった。

「ツンデレなんだなぁ、先生は！」

「……」

ははは、と笑う相喜の目の前で、窓が閉まる。そして鍵もかけられた。

「……せ、先生」

「アレは気にしなくていいのよ。事務員なんだから」

「向日葵、綺麗ですねぇ。花祭さんって、園芸部の顧問してますよね、事務員ですけど」

元から花壇をいじるのが好きな生徒だった、と葉奏は思い出す。

「学生の頃から花壇の所にいたわね……。恥ずかしい話、教えてあげる」

「えっ」

聞いていいのか悪いのか分からないが、気になる。年頃の学生は、こういう話が好きだ。

心なしか葉奏も楽しそうである。

「多分、喧嘩で負けたんだろうけど……夜中に花壇に来たと思ったら、いきなり泣き出してね」

「……何で先生は、夜中の学校に居たんですか」

「当直だったのよ！　でねでね」

当直は警備員の人がやってるんじゃぁ、なんて思った永士だったが、葉奏はそれすら軽く流して話を続ける。

「泣きながら花壇の手入れ初めてね……そこだけなら、ちょっと可

哀想かなって思えたんだけど」

そのあと、何かあったんだ……。

「花に何か言ってたのよ。凄い愚痴だったわ……手加減してやるんじゃなかった～とか、俺は勝てた～とか」

「言ってる事が激しく恥ずかしいですね」

完璧に負け惜しみだった。

「花祭さんって、喧嘩とかする人だったんですね」

「凄かったわよ。警察も何回か来たし……あぁ、その頃はね、もう一人居たのよ。えっと、誰だったかしら」

頭に手を当てて考える。が、出てこないらしい。

「相喜とは正反対の感じで……駄目だわ。相喜がインパクト強すぎて思い出せない」

「大変だったんですね」

「あの時が一番ね」

ある意味の黄金時代。この高校にもあったようだ。

と、チャイムが鳴った。休み中になるチャイムは二回。学校の教室が使用可能になるチャイムと、下校を催促するチャイム。

「もうこんな時間……」

「マーちゃん、帰ろう。お兄さんが心配してるよ」

「そだね！　今日は一緒にＤＶＤも見なきゃだし！」

「仲良いのねぇ」

部室から荷物を持ってくると同時に、会釈をして走っていった真沙。慌てて彼女についていく永士。

「今のは真沙と永士の？　それとも真沙と兄貴の？」

「両方。ていうか、相喜、どこから」

「あっちの窓。……そうかぁ、苦労するだろうなぁ、永士は」

「え？」

「真沙さ、ブラコンじゃん」

うん、とは素直に言えないが、他の子よりは明らかに、兄思いだ。

「兄貴も兄貴で……超シスコンだからな」

「知り合い？」

「知り合いって……先生、教え子だぜ」

「え？」

キョトンとした顔。

「あ、そっか。先生知らねぇか」

兄弟なら名字を聞けば分かるはず。しかし、葉奏の中に、“湖都原”という名字の生徒は、真沙しかいない。思い当たる生徒だってほかにいない。

「あれな都合でさ、名字、変わったんすよね、あいつ」

そして相喜の口から告げられた名字に、葉奏は大きく頷いた。

忘れていたその名字。もう忘れない。

「ひあぁぁっ！？」

「……」

妹に腕を掴まれた拍子に、手にしていたカップから珈琲を溢しそうになった青年は、静かにそれをテーブルに置く。

「怖いなら見なきゃいいんじゃないのか？」

「ここで見るのやめたら、今日は寝られない……にゃあぁっ！？」

「見終わっても寝れないだろうが、真沙」

妹に付き合ってやっている青年、湖都原真哉（ことはら まさや）は、薄型の液晶テレビを見やる。

日本のホラー映画だ。

「ホラーってだけの映画は日本が髄一だからな」

グロテスク要素が強いホラーなら、アメリカか？　などと考えながら、真哉は真沙が持ってきたスナック菓子を口に運ぶ。

何時もなら『真沙の！』と、怒り出す彼女だが、今はそれどころではないらしい。確かに、迫力も画面の使い方も切り替えもいい。

シナリオもいい。そして何より、役者が。取り分け主役の青年が、良い。

名前は何というのだろう。

「……」

スタッフロールに出るだろう、と、真哉は、物語の続きを見る。

題名は忘れたが、この話は、死神の館に迷いこんだ少年少女達が、成人の日を境に、一人ずつ殺されてゆくという話だった。

良く都市伝説などである、“二十歳になるまで覚えていたら死んでしまう”と言った類の話からの引用だろう。

そして少年から青年になった主役が、自分の命を賭して、愛する女性を救おうとする話。

「あわ、あわわ……っ」

まぁ、結局死神は、青年の目の前で、その人を呪い殺した訳だけど。

そしてその直後、死神の腕に囚われた青年は……。

「終わったね」

「……え。…えぇっ！？」

スタッフロールが。

あぁ、主役の青年は、知名矢郁（ちなや かおる）というのか。

あれだけ素晴らしい演技をしていたというのに、聞かない名前だった。ＤＶＤが出たのは何年か前だったから、他の映画に出ていても良さそうだが。

「さて……珈琲、煎れ直してくる。真沙は飲む？」

「のむ～……」

納得行かない終わりだったからか、少し不機嫌そうな彼女に、真哉は小さく微笑んで部屋を出る。

珈琲を煎れている最中、何だか奇声が聞こえた気がしたが、真哉は苦笑しただけで、何も創造しなかった。

そして珈琲や諸々の乗ったお盆片手に戻ると。

「お兄ちゃん、凄い！　やっぱり面白かった！！」

「え？」

ＤＶＤをデッキから取り出しながら、真沙は興奮気味に話した。

「スタッフロールが終わった後にね、主役の人が、死神に飛びかかってね！」

「ふぅん」

スタッフロールの後に映像が入るとは珍しい。

「結局、殺されちゃったんだけどね……最後に、その人の目が、バァァンッて！　ただ、ＢＧＭが無かったのが残念だったかなぁ」

「そっか。面白かったみたいでよかったよ」

そして直ぐに真哉はチャンネルをニュースに変える。

ＤＶＤをケースにしまって、珈琲に砂糖とミルクを混ぜながら、真沙は感心したように言った。

「お兄ちゃんって、ニュース好きだよね」

「あぁ。バラエティよりは」

真哉と言う人間は、そういう人間だ。

笑う事にはさほど興味はない。それよりだったら、世の中の流れや、全国、全世界で起こった事件や事故の方に興味がわく。それが異常なら異常なほど。

両親が離婚して、別々に引き取られた二人。けれども今は共に居る。

離婚した両親が死んだから。そして親族が誰も二人を引き取らなかったから。だから、真哉が真沙を呼んで、二人で暮らす事にした。真哉の仕事は、ネットワークが繋がっていれば出来る仕事全般だ。

データベースだろうがゲームだろうがブログデザインだろうがオークションだろうが、それらの管理開発だろうが。

だから大半は家にいて、暇を持て余している。一度作ったソフトは、消耗品の様に同じものを何個も何個も作らなければいけない訳ではないからだ。一つあれば、その一つを何人もがダウンロードして使う。

使用料金は勝手に入ってくる。

「普通にドラマとかは好きだけどね……映画も」

テレビを囲むようにある棚の中には、真哉と真沙の好きな映画や

ドラマのＤＶＤが並んでいる。そこには少なからずホラーものも並んでいた。

「コピる？」

空のＤＶＤを取り出して真沙を振り返ると彼女は大きく頷いて、目を輝かせていた。

「じゃ、やってくる」

「うん！」

と、分かれてから三十分後。

「お、お兄ちゃん」

「どうしたんだ、真沙」

「こ、怖くて」

おいおい。正直そう思った。

パジャマ姿に枕を持って、真沙は立っていた。少し泣きそうになりながら、小動物の様にプルプルと。

多分、ここで帰したら、彼女は泣き出すだろう。仕様がない。

「いいよ、入って」

溜め息をつきたいのを我慢して、真哉は真沙を部屋に入れた。

「えへ、ごめんなさい！」

「いいよ。僕はもう少し起きてるから」

「うん。おやすみなさい！」

「おやすみ」

と言ったものの。

カチカチとパソコンに向かいながら、真哉は自分のベッドで丸くなった妹を見て、視線をそらした。

流石に、社会人にもなって高校生の妹とは一緒に寝れない。軽く犯罪だ。

「徹夜だな……」

真哉という人間は、自分のベッドでなければ眠れない人間だから。

に：連続殺人事件

『昨晩未明、自宅の居間で倒れている所を母親に発見された吉谷圭吾さん１９才は、直ぐ様、病院に運ばれましたが、直後に死亡。死因は、両目をえぐり取られた事による大量出血と、それによるショック死とのことです。尚、発見された当初、圭吾さんの意識はあったそうで、何者かに襲われた、と証言していたそうで……』

朝、朝食の準備をしながら、真哉（まさや）はそんなニュースを耳にした。

「随分ぶっとんだのが居たもんだな」

両目をえぐる。しかも被害者の自宅で、居間だ。自室ではなく、家族が一番出入りするような部屋。両目をえぐってから運んできたんだろうか。まぁ、居間だろうが自宅だろうが、両目をえぐる、ということ事態が間違っている。リスクが高い。痛みに絶叫でもされたら終りだ。

しかし、このニュースを聞く限りでは、家人は誰一人、被害者が倒れているのを見付けるまで、それに気が付いてすらいなかった。ということは、もし自宅で犯行が起きなたら、被害者は暴れもしなければ、叫びもしなかった。そう、助けを呼ばなかった事になる。……自宅で？

外から遺体を運んできたにしても、居間まで運ぶ必要はあるんだろうか。

無駄の多い、そして面倒な犯行だと思った。

「おはよう……お兄ちゃん」

「あぁ。今日も学校、行くんだろ」

「うん～」

結局一睡もしなかった真哉。なのにその真哉よりも真沙の方が眠そうだ。

「……休みになってから、ほとんど毎日学校に行ってるけど、何やってるんだ？　部活か？」

「ううん。映画見たり……、先生とかヨージ君とかと話したり……先生が事務員さんからお花貰ったり」

「先生がお花ねぇ」

目玉焼きを皿に移して、焼き上がったトーストを添えてテーブルに持っていく。それからサラダと牛乳も。

「今時、そんなことする奴、いるんだな。アイツじゃあるまいし」

「？　アイツ？」

「僕の同期。良く花壇にいるから、探すのは苦労しなかったな」

クスクスと笑う兄に、真沙は首を捻る。

「花祭さん？」

事務員の名前。それを聞いた瞬間、真哉の目が丸くなる。その通り。

「相喜の事、知ってるのか」

「事務員さんだよ、葉奏先生にお花あげた」

「……アイツだったのか」

学生の頃からちっとも変わっていない。というか。

「学校に、いるのか」

「うん。卒業して直ぐ学校に来たって、先生が」

「……」

知らなかった。

けども、知っていたからと言って、別に学校に行くわけでもないので、生活が代わる訳ではない。ただ、そう、少しだけ安心した部分がある。

「アイツは良い奴だから……相談とかしても大丈夫だぞ」

「んー」

珍しい。真哉がそうして、人のことを言うのは。

今までの人生、真哉は真沙と違い、幸せと呼べる期間が少なかった。

両親と仲良く暮らせたのは、真沙が産まれてから一年経つ位までで、そこから離婚するまで、真哉はか弱い母の盾に守られながらも、父の暴力を受けていた。

エスカレートするそれに、次第に母は、真哉を守らずに、自分と真沙の身を優先するようになっていた。高校生になった頃には、真哉は、たった一人で父の暴力を受けるようになる。

身勝手な話だが、真沙に父親の暴力を見せるわけにはいかない、暴力の的にさせるわけにはいかない、と、母は全てを真哉に負わせた。今でも、その時の傷は残っている。

苛立ち目付きが変わり始めると、真沙の目が届かない、父の自室に、真哉は父を引っ張って行く。それから、黙って殴られる。蹴られる。時には、火傷を負うような事もあった。次の日、真沙と顔を合わせられない事も。

しかし、それでも真哉は父に反発出来ないのだ。優しい父を知っていたから。だからまだ、人を信じると言うことを知っていたし、ここまで人を警戒する事だってしていなかった。

高校卒業後、母が妹だけを連れて、去るまでは。

『もう大学生だものね、一人で大丈夫よね』

母の最後の台詞だ。

さんざん自分を盾にして、母親でありながら、言葉での弁護すらしなかった母。彼女は、自分と父を捨てた。

そしてそれから、父との二人の生活が。けども父は、真哉の予想を反して、真哉に暴力は振るわなくなっていった。母が、いなくなってから。

その変わり、父と顔を合わせる機会も、少なくなってしまっていたが。

そして、その日。

『父さん、ご飯』

父親の部屋の扉をノックした。いつもなら、ノッソリと、呼んだ時に出てきてくれるはずだった。けども、出てこない。

『父さん……？』

もう一度ノックする。何も反応は返ってこない。こういう場合は、『うるさい！』と、理不尽だが怒鳴られるはず。でも。

『……と、父さん。開ける、よ？』

ガチャ、ギィ。隙間から見える部屋は、暗かった。カーテンで閉めきった時、特有の暗さがあった。

暗い。暗い。何で。

どくんどくんと鳴る心臓。これは警告なんだ。これはシグナルなんだ。止まっておけという、誰かからのメッセージなんだ。

真哉はそう思いながら、扉を、開けた。

開けた先には……。

「お兄ちゃん？　真沙、行ってくるよ！」

「あ……うん。行ってらっしゃい」

ちょんちょんと肩をつつかれて、真哉は顔を上げる。パンを手に持ったまま、ぼんやりしていた。

「？　食欲ないの？　風邪ひいたなら休まないと駄目だよ！」

「あぁ、大丈夫だよ。真沙、気を付けて」

「うん！」

ぱたぱたと玄関に向かう真沙の鞄には、昨日のＤＶＤが入っていた。そして、そのまま、玄関で靴を履いて、彼女は扉を開ける。

「いってきます！」

扉を閉める前にもう一度言って、彼女は、内と外を繋げる扉を閉めた。

真哉にとって、真沙は天使の様な存在で、絶対の無垢だった。

「……はぁ」

綺麗に空になった真沙の皿と、全く手をつけていない自分の皿。二つを見比べて溜め息を着いた真哉は、それらを下げる。そして、躊躇なく、自らの皿に乗っていたものを捨てた。

両親の様に。要らなくなったから、捨てた。

父は、自分と言う存在を捨てた。

『……』

あの時、あの部屋は、地獄だった。首を切った後に、もがき苦しんだ様な、荒れ具合いと、凄まじい血の臭い。血が吹き出したまま、転げ回ったのか、至る所に、自分の触っている扉の裏側にも、血が付着していて、そして、垂れ落ちていた。

天井から、血の滴が落ちてきて、腕に点を付けた。

『……何だよ』

呟いた真哉は、その部屋に足を踏み入れる。学校用の白い靴下が、

グショリと赤く染まる。気持悪かった。しかし、それよりも、どうしても殴りたかった。

ただ一言、“もういやだ”と残して逝った父の顔を。

『何なんだ。何だよ、あんた！！』

殴った瞬間、首の傷から、血が飛び散ったのだけは覚えている。

それからだ。真哉が大学にも顔を出さなくなって、やがて辞めたのは。稼ぎ手の父がいなくなったから。世間はそう思っているのだろうが、実は違う。

これは真哉なりの身の守りかただった。これ以上、傷付かない為の。

裏切られるなら、最初から出会わなければ良い。深い関係にならなければ良い。

家に篭って、大学で専攻していたコンピュータの勉強をしながら、父の残した金を使って生活をする。それを一年。自分で稼げるようになったころ、真沙を呼んだ。

呼んだと言うよりは、親戚から電話が来たのだ。母親が死んで、真沙が一人になったと。母と幸せに暮らしていた真沙は、実に健気で純粋な子だった。

自分の妹と思えない程に。

だから、傷付けたくはないと思った。ずっとこのままで、成長してほしいと。自分のようにならないで欲しいと。

「広い世界は、怖いんだ」

だから真哉は、狭くて更に深い世界を選んだ。

映画同好会の教室は、異様な雰囲気であった。それは、先輩の一人、坂胸書恵（さかむねふみえ）が泣いていたからだ。

「ど、どうしたの…」

真沙が部室に来たときには、すでにこの状況だった。日当が書恵を慰めていて、永士がオロオロしている。

全く状況の飲み込めない真沙が永士に聞くが、永士にも分からないらしい。二人でオロオロしていると、ようやく書恵が泣きやんで、済まなそうに笑った。

「ごめんなさいね、ちょっとあって……」

「フミ、無理しないで帰りなよ」

スンスンと鼻をすする書恵と日当は冬の制服だった。二人とも黒くて暑そうで。そして部室に顔を出した葉奏も、いつもとは違う、黒のスーツだった。

それで、何と無く分かってしまう。

誰かが、死んだんだと。

「あの……」

いたたまれずに、何かを言おうとした永士だったが、結局続けられずに、口を閉じる。

しん、とした空気が部室を包むなか、そこに相喜が現れる。少し、場を明るくしてくれると期待した永士と真沙だったが、その彼も黒スーツだった。

「何だ、こんなとこに居たのか、皆」

探したぞ、とネクタイを取り払う相喜を、葉奏が軽く睨む。睨まれた相喜は、それでも引きはしない。

「帰るか？　帰るなら乗っけてくけど」

それは微妙に、帰宅を強制するような笑みだった。

こんなとこで泣かれても迷惑だろ。泣くなら家で泣け、とでも言いたさげな。

「……フミ、帰ろう。そっちの方がいいよ」
「でも、家に帰ったって……うぅ」
また書恵が泣き出して、相喜が頭をかく。
「……」
「フミ……。あの、フミの家は今、両親が海外出張で…」
「誰もいねーんだ？」
「そ、そうなんです」
雰囲気的に不機嫌な様子の相喜にビクビクしながら、日当は書恵をかばう。
「相喜」
「なんすか、先生」
制止するように言った葉奏に、相喜ははね退ける。

「メソメソ泣くなよ……泣いたからって何もならないだろ」

「相喜！」

ぱん、と葉奏にひっぱたかれて、相喜は大きく溜め息をつくと、そのまま出ていく。

より悪くなった雰囲気の中、泣きたい気分でいる、永士と真沙に、葉奏は取り繕うような、疲れた笑みで言った。

「せっかくだけど、今日は帰りなさい」

その一言に、まさか二人が逆らえるわけは無かった。

去り際、真沙が葉奏に渡したＤＶＤ。幾重にも包まれたそれが、全ての元凶だとは、誰も考えていなかった。

夕食の席で、真沙は今日あった事を真哉に話した。すると彼は鼻で笑うようにして微笑んだ。

「アイツらしいな」

「そうなの？」

真沙は、花祭なら優しく書恵を慰めてやるのではないかと思っていた。あんな風に突っぱねるとは……。

けども学生時代をあそこで共に過ごした真哉から見れば、あの行動の方が普通であるらしい。

「死んだ人間には泣いてやる必要はないそうだよ。彼曰くね」

甘く煮込んだ人参を口に運んで、真哉は思いだし笑いを浮かべる

そこには真沙の知らない、時間を共有した二人だからこそ分かる相手の考え方があるようだ。

「僕も、あまり泣かなかったな……葬式じゃぁ」

「真沙は泣いたよ。沢山」

真哉は父の葬式でも母の葬式でも、全く涙は見せなかった。

けども、母の葬儀の日、何年ぶりかに見つけた妹は、泣いていた。情けなくも、地面に座り込んで、空を見上げて。子供見たいに。

実際、子供であるのだけど。

「真沙はいいんだ。それで……いや、それがいいんだよ」

まだ、素直に誰かを思えるのだから。

真哉は、多分、もう一生誰かのために涙は流さないだろう。堪えることすらしない。泣くための心が、酷く深い場所で氷ついているから。

真沙は、自分より先に死ぬなんてのは有り得ない。だから、泣くに値する人間は存在しない。

「……変な話しちゃったなぁ。ごめん」

「んーん！　大丈夫。あ、お兄ちゃん、ニュースの時間だよ！」

沈黙が続いてしまいそうになったのに焦りながら、無理矢理話を打ち切った真哉に、真沙も合わせる。

食事時にする会話では無かったな、と反省しながら、真哉はリモコンを手に取り、チャンネルを変えた。そして、そこでは。

『昨夜に引き続き、連続殺人事件の新情報です』

ぴた、と、真哉の手が止まった。

連続殺人事件というワードと、今朝見たニュース画像の使い回しに。

「連続……？」

昼間は部屋に居たせいで、ニュースなんて見ていなかった。いつの間に連続になったのやら。

と、そこに見覚えのある名前があった。

「朝比奈……！」

立ち上がりはしなかったが、呆然としているようすの真哉に、真

沙が心配そうにテレビと兄とを交互に見やる。

朝比奈。朝比奈恭子（あさひな きょうこ）。彼女は高校時代、良く相喜と共に居た、言わば女番長的な人物だった。

別に女番長だからといって、誰かをみだりに傷付けたりはしない。頼りになる、少々喧嘩っ早い女の子、といった感じだ。

そして、その彼女が。

「お兄ちゃん……？」

「……」

知り合いが巻き込まれていた。

その時から、真哉はどこかで感じていたのだ。

自分達も、きっと巻き込まれる、と。

.

さん　：　死神

連続殺人事件の初めの被害者が、実は母校の卒業生だったと知った日、真哉は葉書を受け取った。

それは、葬儀の葉書。

「朝比奈」

呟いた声には、悲しさは見えなかった。ただ、ただ、寂しさが滲んでいるだけで。

「お兄ちゃん、お友達、呼んでもいい？」

「ん？」

喪服を纏い、靴の爪先を地面に打ち付けている真哉に、真沙が遠慮がちに問掛けた。

「今日、遅くなるんでしょ？　真沙、一人で居るの怖いから……友達、呼んでもいい？」

どうしてそんなに後ろめたいそうに言うのだろうか。そう思いながらも、真哉は頷く。

「いいよ。家だとしても、一人じゃ危ないから……もしかしたら、僕も、花祭連れてくるかもしれないし」

それを了承してくれるなら、と言うと、真沙はうんうんと大きく頷いた。それが可愛らしくて、出がけに真哉は真沙の頭を撫でる。

「いってきます」

「いってらっしゃい！」

扉が閉まりきるまで、ずっと笑顔で手を振り続けたであろう真沙に、真哉は心が暖まる様な気分になって、車に乗り込んだ。

朝比奈は女性。そのせいか、葬儀場には、女性の姿が多かった。ギャル系の、と言えばいいのか。

しくしくと泣く声が聞こえるなか、棺の前に、じっと立たずんでいる男の姿を見付けて、真哉はその背に手をかける。

そして一言。

「久しぶり」

真哉自身、相喜に言ったのか、朝比奈に言ったのか分からなかったが、多分、その両方だろう。

振り返った相喜は、昔よりも少しばかり大人っぽくなっているようだった。

「痩せたな、お前は」

「色々あって。今日は……はぁ。何とも言えないな」

「あぁ」

突然すぎて。正直、有り得ないとすら思っていた。

「朝比奈が」

朝比奈が、彼女という人が、連続殺人事件に巻き込まれ、ましてや殺されたなどと。

女番長をやっていた位の女性が、そこらの人間に負けるわけはない。そう思っていた。

「正直、信じらんねぇよ」

「あぁ」

朝比奈に手を合わせ、香を上げると、二人は直ぐに場内から出た。高校までの付き合いだった二人より、やはり、もっと長く居た仲間達に見送られたいはずだ。その為には、会場は少々狭すぎた。

会場から出たものの、葬儀が終わるまではい続けようと、相喜は石段に腰を降ろし、真哉は空を見上げて溜め息を着いた。

「こないだ、学生の葬式行ってよ」

「……一番初めの被害者？」

「あぁ」

煙草を加えた相喜。彼がポケットから出したのはライターではなく、マッチだ。昔から、相喜はマッチを使っていた。

溜め息と共に煙を吐き出した相喜は、呟いた。

「ホント、目だけ持っていってんだなぁって」

「は？」

「瞼。普通に目、閉じてるだけみてぇじゃねぇか。目ん玉ねぇっつうのに」

「何が言いたいんだ、相喜」

「そんなに綺麗に目だけとれんのかって、思ったわけだ」

俺はな。と、じじじ、と煙草が短くなる。

真哉も、少し不審に思っていた。あれほど綺麗に取れない、とは言わない。けども、と言うことは、だ。被害者は、朝比奈も含め、瞬きをしなかったと言うことだ。それとも目をえぐったものが、刃物では無かったとか。だが、抵抗すれば、瞼でなくとも、傷が出来るはず。

……もしかしたら、あるのかもしれないが、少なくとも、目に見える部分には無かった。

言うなれば綺麗すぎる。凄惨で、多大な苦痛の伴う殺し方であるにも関わらず、全てが綺麗すぎるのだ。死体も、現場も、音も何もかも。

真哉は思う。父の死様とは、大違いだと。

「……あ」

暫くの沈黙。と、何に気が付いたのか、相喜が顔を上げて、向こう側を見ていた。手摺を挟んで向こう側。

これまた懐かしい人物。そして、昔お世話になった人物。

「おっちゃん！」

手を上げた相喜と、隣の真哉を見つけた、おっちゃん、西川利彦（にしかわ としひこ）は、あからさまに嫌そうな顔をした。

近付くなり視線をそらし、眼中に入らないように体の向きすら変える始末。

「んだよ、出し抜いたのまだ根に持ってる訳……」

「何でここに…」

「朝比奈の葬式に来たんですよ。西川刑事」

ガッシリと利彦の肩を捕えた相喜と、逃げられないようにその逆側を塞いだ真哉。昔も、そんな事があった。

「ははっ、ヤクザとヤりあった時以来か？　な！」

自分らより十は歳上の利彦に対して、相喜はタメ口だ。正反対に真哉は敬語。深く溜め息を着いて肩を落とした利彦は、気を取り直して、相喜の腕を外す。

「あぁいうのは二度と御免だ。悪いが仕事中なんだ。邪魔はするな」

「連続殺人の？」

「……。お前達だから話すがな。そうだ」

隠す事もないと思うのだが。

「葬式の日ぐれぇ、そっとしとけよ……」

「そうは言ってられん。これは連続殺人事件だからな。次の被害者が出てしまう」

「そっか」

確に。利彦の言う通りだった。

「目以外で、何か共通点は見付かったんですか？」

「う？　……う、む」

不意に投げ掛けられた真哉の問いに、利彦は曖昧な返事をした。
見つけた共通点を教えたくないのか、それに自信がもてないのか。どっちにしても知りたかった。この悪い予感が、そうさせる。

「あるんなら言ってくれよ！　俺らの仲だろ」

どんな仲だ。高校生時代に引っ張っていかれたというな、苦い仲でしかない。その後、紆余曲折があって、結局は警察に貢献した事になったのだが。

「……言いたくないならいいですけどね。自分で調べますから」

「！」

ある意味で、利彦に対しての切札的台詞。
これを言うと利彦は何でも話してくれる。危険を犯させるくらいなら、話してしまえ、という本末転倒に思えなくない考えだ。

「分かった、話す」

「さっすが！」

こっちを見て笑った相喜に、真哉は肩をすくめて軽く笑みを返した。何年も会ってなかったはずなのに、どうしてか、直ぐにあの頃の感覚が戻ってきた。

これが青春時代の絆なんだろうか……なんて思ったのは一瞬だけだった。

「被害者は全員、死ぬ前に、酷く脅えていたらしいんだ。死神が来るってな」

「……へぇ」

「随分、非現実的だね」

期待外れの答えに、今の気持ちをそのまま表情に出して脱力した相喜。

真哉は、死神というワードに引っ掛かっていた。死神。つい最近、何かあったような。……そして。

「あ。ＤＶＤか」

「は？」

そう。真沙と一緒に見たＤＶＤだ。あれにも死神が出てくる。死

神が一人ずつ殺してゆく。

「模倣犯、か？」

「……ですかね。これじゃぁ完璧に快楽殺人だ。理由なんてあったもんじゃない」

「つーか、捕まえ難いな」

もしもＤＶＤの模倣だとしたら、果たして犯人はどれだけの人物なんだろうか。一日に何人のペースで完全犯罪を遂げているんだろうか。

犯行の派手さとは違って、証拠を全く残さない。まさに神業だ。

「お前らはいいからな。関わるなよ、一般人」

「え、今更？」

真哉らが事件に興味を持ち始めたと分かったのか、慌てた様子で利彦は二人を止める。しかし、ニヤニヤしながら、相喜は手遅れだと言いたさげに、くるりと真哉を向く。

しかし。

「……相喜。僕は妹に害が及ばない限りは関わらないよ。妹に心配かけさす訳にはいかないから」

えぇ！？　と、仰天している相喜と、胸を撫で下ろした様子の利彦。そして人の気配がして真哉が振り返ると、そこには、会場からゾロゾロと出てくる人々が。葬儀が終わったらしい。

「……」

無言のまま、その人々を見送っていると、その波の中から、数人、こちらに歩いてきた。これもまた、見覚えがある面子で。

朝比奈の右腕と左腕だった昼二夜美希（ひるにや みき）と堂戸小由（どうと さより）、そして朝比奈の恋人、老語一義（おいご かずよし）。

「あんたらも、来てたのか」

ハンカチで目元を拭いながら堂戸が言う。まぁな、と返したのは相喜で、真哉は小さく頷いただけだった。

あの三人の中で、一番落ち込んでいるのは、当たり前だが、一義だろう。堂戸と昼二夜の後ろをフラフラと着いてきて、今だって顔を上げない。

「二人は来るでしょ、この後の」

「あぁ、僕はいかな……」

「来るわよね！」

朝比奈の自宅で行われる、葬儀の延長の…飲み会の様なもの。元から参加する気は無かった真哉だったが、昼二夜が酷く進める。

助けを求めるように相喜と利彦を振り替えると、利彦は困ったような苦い表情をし、相喜は、顎で一義を指した。

一義の話し相手になってやれと言うことか。

「分かった……行くよ」

「ありがと」

きっと、一義と同世代の男性はいないのだろう。彼には、家族もいない。だから、この気持ちを正直に話せる人間が側にいないのだ。こんなにも悲しいのに。

それを察した彼女等は、彼と同じく悲しいと思っている。相喜も、少なからずそう思っているんだろう。

真哉は、そこまでは考えていなかった。

会場からは少し距離のある朝比奈の家。彼女の家は、思ったよりも大きく、賑やかだった。盛り上がっている大広間を避けて、真哉と相喜、一義は、もう暗い、庭に出ていた。

庭には、木で造ったテーブルと椅子があり、三人はそこに座って、昼二夜と堂戸に持ってきてもらった料理をつつく。

食べているのは相喜だけだが。一義は酒ばかり飲んで、真哉はそのどちらでもない。そこにいるだけ、と言った感じだ。

会話がない。

いたたまれなくなってきたのか、相喜が箸を加えたままで、肩を落とす。が、今はどんな楽しい話をしても場違いだ。

この場を乗りきる話題が見付からない。

「一義」

と、口を開いたのは真哉だ。

「あんまり飲みすぎるなよ。そんなに、酒強くないだろ」

「……いーんだよ……別に、もー」

早くもろれつが回りきっていない。目は虚ろだし、体勢も低い。完璧に酔っている。

「おい、ヤケになんなよ……」

一瞬、自殺でもするのではなかろうかという考えがよぎった相喜が、はっとして一義を止めようとしたが、どうやら、そうではないらしい。

「次、俺の番だからさぁ、もういいんだ……」

俺の番？　相喜と真哉は互いに視線を投げて、一義を見やる。

「俺の番って、どういうことだよ」

相喜が聞くと、一義は諦めたような笑みを浮かべて、そのままの意味だよ、と答えた。

「次は俺……死神が来るんだ。俺を、殺しに…恭子と同じ様に、俺も」

でも、何故だろう。彼の中には、死への恐怖は全く無いように思える。むしろ、それを良しとしているような。

「……」

言葉を無くして絶句してしまった相喜に変わって、真哉が続けた。

「死神ってどんな奴？」

「おい……！」

何聞いてんだ、と言いたさげな相喜を制して、真哉は答えを待つ。

暫くして、一義は紙コップの中にある酒を飲み干して、言った。

「死神は……死神だ。真っ黒い。綺麗な声をしてる。それで、言うんだ。目を、目と命を奪うって……それから、一人だけ、助けてやるって、言うんだ」

「一人だけ？」

「死神は、決めてるんだ。誰を殺すのか。もう、決まってる」

「何を基準に」

「知るか！」

ばん、とテーブルを叩いて肩を震わす一義。溜め息を吐いた相喜は、立ち上がって何処かに行ってしまった。

残された一義と真哉は、ただ沈黙を守るばかり。だが、それは真哉が考えをまとめるまでの時間だった。

「一人助けるって、一義、お前さ」

言ってはいけない事だと分かっていた。これを言ったら、たぶん怒るだろうと、思っていた。

けど、言わずには、いられなかった。

「……どうして朝比奈を、その一人に選ばなかったんだ」

「選んださ」

即答だった。彼は戸惑いもせずに言った。選んだと。

「俺は選んだ！　でも、恭子の方が先だった。死神が来るって、いつもいつも……」

「その死神から、守ってやろうとは、思わなかったのか」

「相手は死神だぞ！？」

「その時！　朝比奈が脅えてる時！　お前は死神なんて本気で信じてたのか！」

「……っ」

一義の話を聞けば、朝比奈が死んだ直後だ。彼が死神の声とやらを聞いたのは。だとすれば、朝比奈が生きている間は、死神を信じる要素がない。

「例え相手が本当に死神だったとしてもだ、守ろうとして守れない

分けないだろ」

自分は、死んでも真沙を守る。相手が誰だろうがなんだろうが、絶対に。傷一つ、許さずに守りきる。

死なせるなんて、しない。

だからこんなにも苛付くのだ。この、一義に。

「朝比奈が怖がってるときに、お前は何やってたんだ」

その直後だ。

「うるさいっ！！」

父が死んで以来、初めて殴り倒された。耳元で植木鉢が割れた音が響いて、また殴られる。

殴られる時は防御してはいけない。そうすれば更に強い暴力がくる。

「お前に何が分かる！　恭子にはな、恭子には、俺よりも大事な友達がいて！　俺よりも生きててほしい友達がいて……俺には、目が……目は、二つしか、ないんだ。俺には目が、二つしか無いんだよ

……」

「……」

頭が、くらくらする。

音を聞き付けて来た相喜が、直ぐに一義を落ち着かせて、真哉を立たせる。その時、フラリと足がもつれた。

「おい、大丈夫かよ」

「悪いな、大丈夫」

殴られたのは久しぶりで、体が驚いてしまっているようだ。

「腫れるぜ、これ。冷やしてもらえよ。……あ、ちょっと、堂戸！」

丁度、縁側付近を歩いていた堂戸に声をかけ、相喜は真哉を任す。見た瞬間、堂戸が目をまん丸くしたが、庭の惨状を間の当たりにして、察してくれたらしい。

「……後で謝らないと」

冷やしたタオルを貰って、頬に当てる真哉の横で、堂戸が上着に着いた土を払う。

「……何したの、一義、あんな怒らすなんて」

「ちょっとね。気に入らないこと言った」

「あんたって、昔から人が嫌がること言うわよね」

「……まぁ」

氷と水の入った洗面器にタオルを浸して、真哉は絞る。考えているのは、一義の言葉だ。

自分よりも大事な友達。思い当たるのは、堂戸と昼二夜くらい。

正直、死神の話も信じきってはいないのだが、聞いておくに越したことはない。

「こんな時にあれだけどさ」

「何？」

「……朝比奈と一義、君と昼二夜の四人で、最後に何したか、覚えてる？」

堂戸の手が止まった。

「嫌なこと聞くね」

「ごめん」

「……いいわ。ＤＶＤ見た。怖いやつ。スタッフロールの後に不意打ちでさ。メチャメチャ怖かった」

「……」

「それで、ちょこっと話して、解散。で、最後」

「そうか……ごめんね」

ＤＶＤ。ここでもだ。死神の話題と言い、スタッフロールの後に最後のチャプターがあるホラー映画といい。

と言うことは、確実に、妹が。真沙が。

「帰る」

「え？」

「ごめん、帰る」

タオルを放って、上着を引っ付かんで、真哉は、慌ただしく縁側を走る。

「お、ちょい、待て真哉！」

すれ違うと同時に追い掛けて来た相喜。だが、今は彼に構っている余裕はない。

「帰る。急いでるんだ」

「待てよ、っと」

玄関を過ぎ、道路を渡って向かい側の駐車場。運転席に真哉が乗り込むのと同時に、相喜が助手席に座り、シートベルトをかける。

「……車は？　お前の」

車のエンジンをかけ、自分もシートベルトをかけながら、相喜に問う。

すると彼は笑っていった。

「今日の俺は、乗り専なんで」

「そうですか！」

そして真哉は、思いきりアクセルを踏み込んだ。

それを利彦が見ていたともしらずに。

「今のはスピード違反だな……まぁ、いいか」

彼は言いながら、朝比奈邸へと入っていった。相喜に言われた通りに、老語一義という男を保護するために。

.

よん　：　そうしきのし

息を切らせて帰り着いた家で、妹は幸せそうにホットケーキを食べていて、キッチンには見しらぬ青年が。

「や、やや、夜分に、すみませ、ん。あの、女の子と二人きりなのはどうかなって思ったんですけど、でも、あの、その……」

「……ホットケーキ、焦げるよ」

フライ返しを片手にシドロモドロと弁解している彼に、半呆然としながらも、真哉は背後で登り始めた黒煙を指す。

そして彼は酷く慌て、妹の真沙は笑顔で言った。

「おんなじ映画同好会の、ヨージくん。ヨージくん、お兄ちゃんだよ！」

「は、初めましてっ」

「うん、初めまして……あ、火傷しないように…」

「アッッ！！」

何だか大変な事になっていた。

「お邪魔してますー。つうか、お前ら面白すぎ！」

「花祭さん！」

戸口からヒョッコリ顔を出した相喜が、キッチンで何やらやりとりをしている永士と真哉を笑う。

「本当にお兄ちゃんと同級生だったんだ！」

「本当に……って」

苦笑しながら、相喜は頷いておく。正直、学校の中で顔を合わせることは少なかった。

顔を合わせるのは、夜の公園か、夜の駅近く。

「まぁ、仲は悪くは、なかったな」

確信を持って言えること。仲は悪くなかった。真哉の冷めているのか拒絶しているのか曖昧な態度があるため、仲が良かったとは言い切れないが。

あの頃の彼にしてみれば、最大限に近付けて、あの距離だったの

かもしれない。

「大変だったみたいだな……その、親父さんの事。真沙は大丈夫だったのか？」

「え？」

何が？　と言う、キョトンとした表情で見上げられた相喜は、だから、と続ける。

「親父さんに、殴られたり……」

「相喜」

遠回しに言っても分かってもらえなかった。だから、具体的に尋ねようとした時だ。

テーブルに焦げたホットケーキを乗せた皿が、乱暴に、というよりは、置く寸前で手を離した様な、ガシャンという音を立てて落ちた。

「余計なことは言わないでくれ、相喜。分かったか？」

笑顔で。

「……はい」

あの笑顔に逆らってはいけない。あぁ見えて真哉は恐ろしく強いのだ。行動の一つ一つに迷いがない分、動作が速い。

初めて真哉と殴り合いになった日、相喜は初めて、負けを経験した。素人だと思って、いや実際に素人だったのだが、油断して手加減してやった結果、本気を出してもどうにもならない所まで追い込まれていた。

そして彼に負けて、花壇で愚痴っていた所を葉奏に目撃されたのだ。

「それで、真沙。んん、友達って、まさか、男の子だとは」

「ぼ、僕も、まさか、こんな時間まで居る事になるとは……！」

何故か真哉の隣に座ることになり、軽く脅えの混じった恐縮具合いで縮こまっている永士に、真沙は変わらず明るく笑う。

「真沙もびっくりだよ～っ！」

眼前の男子二人の心境を全く理解してない天然具合だった。

真沙の隣に座った相喜が、飽きれ顔で目の前の二人を見る。骨折り損、という言葉が似合う。

「……はぁ。まぁいいか。今日はもう遅いから、良かったら泊まっていかないか、永士、くん。と、相喜」

「えっ、あの……！」

「あくまで良かったらだから」

「俺泊まる～」

やはりシドロモドロの永士に、心なしか真哉は冷たい。溜め息を付いて手をあげた相喜と、小さく挙手した永士。

「お前の部屋の床かしてくれ」

「あぁ」

「ぼ、僕はここら辺でいいです……」

「いや、せめてソファで」

遠慮なのか、永士はフローリングの一角を指差した。それはいくらなんでも可哀想なので、ソファを進める。

真哉だってそこまで鬼ではない。

「後で毛布持ってくるね！」

「ありがとう、マーちゃん」

その二人のやりとりを聞きながら、真哉は居間から出る。着いてきた相喜は、階段を上がりながら微笑んだ。

「ほのぼの過ぎだよなぁ、あの二人」

「……」

無言の真哉に、相喜は心中で爆笑していた。露骨すぎて。

「何だ、いっちょ前に親父気分か？　妹取られた気分でいるのかよ」

「……何言ってんだ」

二階にある手前の扉を開けて、真哉は押し込むように相喜を押して戸を閉める。

向こうの声も、こっちの声も、相手側に聞こえない。厳重に鍵もしめて振り返ると、相喜が真哉のベッドにダイブするところだった。

「子どもか、お前は」

「やるだろ、普通」

「やらない」

普通はやらない。少なくとも真哉はやらない。

人のベッドで仰向けになって天井を見つめている相喜を放っておいて、真哉はノートパソコンを開く。

「お前ってば、相変わらず、そういうの好きなんだな」

「あぁ。仕事だし……それに、人と関わらないから」

自分が作ったものを、気に入った人が勝手に持っていって、クレームや不都合はメールで。顔と顔を突き合わせる訳じゃないから、相手と乱闘になる訳はない。

手の届かない、絶対の距離。

「……真沙は知らないのか？　お前が、親父に殴られてたとか」

「知らない。隠してた。いや、隠してる。今でも」

そう言った瞬間、義一に殴られた頬が、ズキンと痛んだ。隠したとしても、自分は、体は覚えている。そう伝えるように。

消えない傷だってある。消せない傷もある。時々、不意に痛み出す傷も。でも、全ては妹と、哀れな父のためだった。

「真沙は、知らないままで、今のままでいてほしいんだ。……それに、父さんだって」

「おかしいんじゃねぇか、お前。何であんな親父かばうんだよ」

「ある意味、ある意味でだけだけど……父さんは俺に優しかった。だからだな」

「……」

訳分からん、と起き上がった相喜に、真哉は本題に入る。重要な事だ。

「そいで？　例のＤＶＤ、何なんだよ」

「三年位前に撮影された、ホラー映画だな。皆殺しにされる究極のバッドエンド」

「マジで」

死神の館に迷いこんだ少年少女が、成人の日を境に、殺されて行くと言う物語。

死神を倒す術は無く、ただ逃げて、時に戦い、延々それを繰り返して、死んで行く話。弱い者、諦めた者が、死ぬ。

「……死神くらいしか被ってねぇじゃん」

「あぁ。この死神の趣向に、両目をえぐるなんてのはない。ただ、斬って刻んで、それだけだ」

死神が、主人公らと対話するような場面もない。

「……相喜は義一の言ってた死神、信じてるか」

「は？」

この話を考える上で、最も重要で、最も信じがたいもの。それが、死神。

本物の死神を信じるのか、人が化けた作り物か。

「そうだな。俺は信じてないな。見てねぇし」

「そうだよなぁ」

見てない。本物の死神を、この目で見れば信じる。しかし、見る機会は無い。

「まだ死なねえしな、俺たち」

「そうみたいだ」

そこで、ポン、と出てきたのが、例のＤＶＤの主役を演じた俳優の名前。

「知名矢　郁」

「誰」

「主役だよ。主役」

インターネットで調べてみると。出てきた。

「知名矢郁……」

「……今、なんもやってねぇんだ」

代表作に上がっているのは一つだけ。しかも題名はブランクで、作品の概要だけがのっている。

『呪われし館の物語。死神に狩られる彼等は逃げられない。　その血にまみれた、幻の作品を見たものは、彼等と同じく呪われる運命にある。

現場監督兼シナリオ担当・景平孝作（かげひらこうさく）』

そう、書かれていた。

「すげぇ自信満々の誘い文句だな……」

「誘い文句じゃなかったら？」

「はい？」

「事実、だったら」

見たら、呪われる。それが事実であったならば。

「信じるのかよ。人間が作った、あくまで創造の産物だろ？　死神なんて」

「呪われた物は、大概人間が作ったものだよ。黙って置いておけば只の石ころなのに、伐りさえしなければ只の木だったのに。人間が

そうやって呪いを生み出す」

余計な干渉さえしなければ、行きすぎた気遣いなんてしなければ、優しすぎる行動をとらなければ。

こんなにも、道を誤る事はなかったろうに。

「真哉？」

「……」

「おい、大丈夫か、気持悪いのか」

口許に手を当てて、胃の辺りを押さえている真哉に、相喜が声をかける。

学生時代にも度々あった事だ。

「立てるか？」

「……いい、大丈夫だ」

胃の辺りがドクドクと脈を打っている。それを感じながら、真哉は相喜を手で制す。

大丈夫。そう言っていたら、本当にその様になっていた。

「悪い。少し動揺した」

「そうか……」

動揺。真哉には似合わない言葉だと思う。しかし、真哉の言うように、あれが動揺だというのなら、明らかに真哉の方が相喜よりも、精神的に弱い。

それは真哉にあって、相喜にはない、トラウマ。

「……今日は、休むか」

「？　別に構わないが」

「俺は疲れた。……それに、何かもう訳分かんないしな」

確かに。やるせなく微笑んだ真哉に、相喜も笑いかえす。信じられないものが多くて話は進まない。

「布団、持ってくる」

「おう、サンキュー」

適当に持ってきた布団をひいて、寝転がりながら、他愛のない話をして。

明日、何が起こるか想像もしないまま、二人は就寝。

朝一番、あんな形で起こされるとは思ってもみなかった。

部屋に響いたけたたましい音は、携帯電話だった。しかも自分の物ではない。

「あい……もしもし。花祭……あぁ？　堂戸？　おはよう……」

寝起きのままの声音で受け答えしている電話の相手は、昨日再会

したばかりの堂戸らしい。

彼女はかなり大きな声で話しているようで、何を言っているかまでは分からなかったが、声だけは聞こえている。

落ち着けよ……と心の中で思いながらも、こちらも寝起き。真哉はぼんやりとその様子を見守っていた。

すると、花祭の表情が、徐々に徐々に、寝起きのそれとは変わり、何やらただならぬ気配を告げる。無理矢理意識を覚醒させるに値する出来事。

それは、死神の足跡。

「マジかよ……」

義一が、死んだ。両目をえぐられて。朝比奈邸の一室で、息絶えていた。

白のシーツと顔を染める、赤黒い跡さえなければ、まるで普通に眠っているようだったという。

朝比奈邸の手前にある駐車場。娘に続き、娘の恋人までが死んだ屋敷は、どこか静まりかえり、どこか騒がしい。

朝が来ていないように思える、おかしな雰囲気だった。

「職務怠慢……とは思わねぇけどよ、あんたの事だから」

利彦と話しているのは花祭だった。昨夜、利彦に事の次第を説明し、犯人逮捕の情報を流していたのだ。結局、犯人は捕まえられなかった様だが。

「……被害者があの部屋に入ってから、その部屋の近くを通った人間も、中に入っていった人間もいない。被害者自身、部屋からは出てこなかった」

昨日は葬式。不特定多数の人間が出入りする屋敷の門より、義一を監視していた方が、確実で速いと思ったのだろう。

しかし、それでも、義一は死んだ。

あの部屋の中で、一体何があったのかも分からない。

「……朝、部屋に行ったら、既に死んでたそうだ」

一番始めに彼を見付け、部屋から逃げるように出た直後、相喜に助けを求めた人物。堂戸。

まだ顔を会わせてはいないが、相当ショックだったに違いない。

「訳が、分からんよ…」

それは、誰もが思っていた事だった。

犯人はどこから来て、どうやって殺して、どう逃げたのか。

「目をえぐるのが、殺した後なら……やれないことはない……けどな」

呟いた相喜に、利彦があからさまに眉間に皺を寄せる。

「最初の被害者が、出血多量のショック死だったのを考えると……違うんじゃないか」

言った真哉と利彦の目が合う。

関わるな、と言いたそうな目付きだったが、真哉も相喜も気付かないフリをする。関わるなと言われても、もう遅い。

特に、真哉は。

「次の被害者、見付けるしかねぇな」

「そうだな……」

面倒と僅かな焦りの見える表情で踵を返した真哉と相喜。

恐怖が眼前に迫ってから行動するのは、遅すぎる。

.

ご：死神の条件

次の被害者。それは死神を見た人間で、あのＤＶＤを見た人間。

「……つか、又貸ししすぎじゃねぇの」

「確かにね。でも、到底普通のモノじゃない」

そう。誰かを殺すために無差別に贈られる、何か。人の手を渡り、広がる。

「死神信じちゃったよ」

「信じる理由もないけど、絶対に否定できる要素もないから……一義が言ってた事とか、有り得ない現場を考えるとな尚更ね」

車を運転しながら、ラジオをつけた真哉。

そのラジオでは、既に一義が死んだニュースを報道していた。

「最近のメディア、速いな、伝達が」

「どうせ、朝比奈の葬式の時から居たんだろ。報道の人ってちゃっかりしてるから」

「でもなぁ、何かなぁ」

助手席で頭の後ろに手を組む相木。目の前の景色はいつもの通りで、天気は晴れ。暖かい陽気。

いつもなら、ウキウキとした気分でいるはずなのに。

「……まぁ、待ってればいずれ、俺達に死神が来るはずなんだけど」

「妹もだろうが」

「あぁ、真沙は命に変えても守るから心配するな」

「……」

それが心配だ。真哉なら、妹の為とあらば、本当にやりかねない。彼にとって妹とは、自分より優先すべき人間なのだ。

「……まぁ、怖い思いさせたくねぇなら、先手打った方がいいんじゃね？」

「どうやって」

少し苛立った様子でハンドルを切った真哉に、相喜はあえて笑って訪ねた。

「お前んトコに回ってくる前は誰だったんだよ」

「先輩、あのＤＶＤ見たんですか？」

映画のサウンドトラックをＢＧＭに、真沙が日当と書恵に尋ねる。見ていない永士は、ただ笑顔で聞いているだけだ。

「見たけど……いまいちだったかな。中途半端に終わっちゃった感

じ」

思い出しながら言う書恵が、ねぇ、と日当を向くが、日当は首を捻る。

「え？　僕は良かったとおもうけど」

と、そこで葉奏が会話に入ってくる。

「もしかして、坂胸さん、最後まで見なかったんじゃない？」

「え……」

「最後にですね、主人公がバサァッて切られるんですよ！　スタッフロールの後で」

うそ、と口に手を当てた書恵に、日当が笑う。

「ドンマイだね。フミはスタッフロールは見ないで映画館から出る人だからね」

邪道だ、とか、時間の無駄とかいう話をしてから、ふと真沙が尋ねる。

「そういえば、書恵先輩が日当先輩に渡して、それから私が借りて、今、葉奏先生が持ってるんですよね、ＤＶＤ」

何と無く確認しただけだった。

「そうね。私は親戚の子から」

「すごい又貸ししてますけど、いいんですか？」

永士に言われて、書恵は頷く。皆は返してくれるでしょ？　と。

昼過ぎ。帰ってきた真沙に、ＤＶＤの軌跡を聞いた真哉は、一人

で書恵の家を訪ねた。

彼女は多分、相喜がいると緊張してしまうだろう。後輩の兄でしかない初対面の男の前でも、緊張するだろうが。

「えぇと、真沙ちゃんの……お兄さん？」

「えぇ。あのＤＶＤの事を聞きたくて」

真沙の先輩である彼女。一年しか年が離れていないと言うのに、随分と大人っぽい。

落ち着いていて、礼儀もなっている。

「お兄さんもあのＤＶＤを？」

「見ました。個人的に凄く気に入ってね」

笑顔で会話しながら、怪しまれない程度に探りを入れる。

「あの話にもあったけど……君は死神を信じるかい？」

「え？」

「人間を殺して回る死神。信じる？」

僕はあまり信じてないんだけどね。と、真哉が言うと、彼女は、笑って答えた。

「いる訳ないですよ、死神なんて」

「そう」

余りにもはっきりとした答え。なら、彼女にはまだ、死神は、話しかけていない、と言うことになる。

まだ、ここまでは来ていないと言うことか。少なくとも、彼女の番ではない。

「そう言えば、お兄さん」

「ん？」

思考を巡らせ考え込んでいると、フと顔を上げた。それはあの失敗の話で。

「スタッフロールの後の映像、見ました？」

私は見逃してしまったんですよ、と苦笑する書恵。真哉は少し考えて、コーヒーを煎れていた時の真沙の奇声を思い出した。

「僕は見なかったな。別の場所にいて。……でも、真沙は見たみたい」

主役が切られて、最後に目が映ると言う場面。ＢＧＭは無かったと言っていたような。

「私だけ見逃しちゃって……」

「あぁ。僕もまさか、あの後に続いてるとは思わなかったよ」

それから他愛の無い話をして、笑顔で分かれて。

それが彼女との、最初で最後の会話だった。

懐かしい、高校の校庭。相喜は変わらず、庭の手入れをしている。

「変わらないな」

「そりゃぁな」

書恵との話を報告がてらに立ち寄った校舎は、相変わらずのいでたちだった。

ただ、若干花壇が色鮮やかになっていることを覗いて。

「……そっか。葉奏も見たのか」

「そうみたいだな」

土のついた軍手を外しながら、相喜は立ち上がり、一つ伸びをする。

「それよかＤＶＤだ。あれ、押さえとこうぜ。無駄に広がらないように」

「……あぁ、それはお前がやってくれ。僕には他に用がある」

「あ？」

「もう一人。日当というのに話を聞きにいく」

あ、そう。と、言った相喜は、少し考えてから言った。

「一人で大丈夫かよ」

「何でそれを聞くんだ。お前に勝った男だぞ」

と、拳をつくり、叩くような真似事をした真哉だったが、それは学生時代の話だ。

「だってお前、折れそうじゃん」

「……」

言われて、真哉は眉を寄せる。

「これでも、体は鍛えてある……心配するな。お前は早くＤＶＤを取ってこい」

「あーぃよ」

ぱたぱたと軍手を叩き合わせて大まかな土や誇りを落としながら相喜は校舎に戻って行く。溜め息をつきながら、駐車場に戻ろうとした真哉は、何かの気配に振り返った。

一瞬、冷たさが肌を舐めた気がしたのだが、周囲に変化はない。

「……」

気のせい、で片付けてはいけない予感がして、真哉は頭の片隅にそれを留めたまま、車に乗り込んだ。

「あっ、す、すみません、何だかごちゃごちゃしてて！」

「いや……」

書恵といい、この日当という青年といい、真哉に対して警戒、というそぶりを見せない。

後輩の兄、というのに緊張はしているようだが。

「真沙ちゃんに写メとか見せてもらったから……あはは、やっぱり格好良いですね」

「いや」

彼が言う通り、ごちゃごちゃしている部屋だが、汚いわけではない。たんに物が多いだけなんだろう。

「ところで、君は……ＤＶＤ、見たかな。ホラーの」

「あ、死神の話ですか？　みましたよ」

と、笑顔で答えた日当は、右手で左の指を擦るようにする。それが終ると今度は逆を。

「寒い？」

「少し」

言われてみて気が付いたのか、日当が苦笑する。
暗くはないのに、この部屋は少しばかり寒い。クーラーもない部屋だが、日当が自身で気付かなかった事を考えると、いつもの事なのかもしれない。

「日当？　いい？」

「あ、ちょっと待って」

コンコン、というノックの後、母親だろう、女性の声がした。

「こんなものしかないんですけどって」

「そんなに気を遣わなくてもいいのに……ありがとうございます」

何て言っている間に、下から小さな子供達の声で、『いいなぁ』やら『僕も！』やらとせがむ声が。

「兄弟、多くて」

「そうか…皆、男の子？」

「いえ。一人妹で、双子の弟がいます」

「じゃぁ、今のは弟くん達か」

「はい」

他愛もない話をしている内に、日当の肩から力が抜けたようだ。そこで話を戻す。

「ところで、ＤＶＤだけど……最後の、見たかい？　僕は見ていなかったんだけど」

「フミもそうみたいでしたけど……見ましたよ。僕」

「へぇ」

す、と視線をそらした日当は続ける。

「あの主人公は死神に負けてましたけど…僕は守りきります。大切なのは、絶対」

真剣な表情には、僅かな脅え。

真哉は目を細める。彼は、たぶん。

「死神に、会ったね？」

「……」

一瞬、本の一瞬、彼の目が真哉に向けられた。その時の目は、絶望したような、けれども安心したような、おかしな目だった。

「死神に会ったんだね、日当君」

そして次の返事は、真哉の現実を打ち砕く。

「……はい」

死神が、実際に存在してしまっている。それを肯定する言葉。少なくとも、日当は死神の存在を認め、そして脅えている。

「……実は、僕も会ったんだ」

嘘だが。

「え……」

「厳密に言うと、声を聞いた程度なんだけどね。……綺麗な声だった」

義一が言っていた事だ。綺麗な声だと。

すると日当は、思いの外食い付いてきた。

「姿も、綺麗ですよ」

「綺麗？」

「はい。……あの、映画の主人公みたいな…でも、少し違う感じの……黒い、死神です」

「……人の姿なのか」

「そう。お人形みたいな」

それを話す日当は、何処かで虚ろ。

「でも、その死神さん、皆を助けてくれるって言うんです…」

いきなり、彼は真哉を向いて微笑む。普通に微笑んだだけのはずなのに、普通の笑顔に見えない。

表情と内側の感情が合っていない、そんな笑顔。

「特別に、条件をクリアー出来たら皆を助けてくれるんですって…」

「そう。それで？　条件って？」

「いっこ目は以外と簡単でした……三十分くらいで終わったので。次のはまだ分かりません」

具体的に、内容を尋ねようとしたときだ。真哉の携帯が鳴る。

着信は相喜だ。

「ごめん、ちょっと」

「あ、いいですよ」

部屋の隅に移動してボタンを押すと、直ぐに相喜が言った。

『最後、マジでビビるな』

何の話だ。真哉は一瞬言葉を詰まらせる。そして落ち着いて考えてみて、今度は言葉を失う。

『おーい、真哉？』

「お前……」

『ん？』

「見たのか、アレを」

相喜にまかせたのは、ＤＶＤの回収。死神の、ＤＶＤの……回収。

「お前は……何て事を！」

『怒るなよー。あ、違う違う。今の電話はそんなんじゃねーの』

「はぁ？」

何故だろう。嫌な予感がする。

『今、病院なんだ。……わりーんだけど、俺、学校の宿直室に保険書入ったパスケース忘れてさぁ。取って来てください』

「……お、おま、え」

言葉もない。もう、もう、何もかけてやれる言葉がない。

「日当くん、僕は行くけど……」

「あ、はい」

「何かあったら、真沙を通してでも連絡くれていいからね」

「はい、ありがとうございます」

その時の彼は、笑顔だった。そして、何処か諦めたような、力のない、声だった。

相喜に言われた通り、保険証を持っていった真哉は、彼の姿に目を見開いた。

「サンキュー」

真哉の手から保険証を受け取った相喜の右目が、眼帯で覆われていた。

「どう、したんだ」

真哉の驚きように吹き出したのは、当然相喜。

「あっははは！　ちょっと絡まれてさ。運悪く、相手のパンチ喰らっちゃったわけ」

「……目は、大丈夫なのか」

「ちょっとヤバイらしいけど……大丈夫だろって」

相喜の説明には府に落ちない事が多い。しかし、無い、とも言い切れない。

だから、真哉はそれ以上は言えなかった。いや。それを見付けなければ、つっこんで聞いていたかもしれない。

真哉の興味を、相喜の怪我よりも引いたもの。それは。

「知名矢、郁……！！」

「は？　え……」

知名矢。知名矢、郁。

その名前にピンとこなかった相喜だったが、自分をすり抜けた真哉の姿を追って言って、息を飲む。

あの、映画の主人公。最後の最後で死神に殺された、主人公。

彼が、いた。

「知名矢！！」

いきなり真哉が言ったのが聞こえて、相喜は慌てて彼を追う。たぶん、真哉は今、混乱しているはずだ。いつもの彼なら、こんな場所で、しかも初対面の人間に向かって、そうは声をかけない。

「な、なんですか！」

答えたのは、知名矢の横にいた女性だ。いかにも仕事が出来そうな雰囲気の彼女に、知名矢は言う。

「いいよ、美紀代(みきよ)さん。……それで、僕に用事かな？」

知名矢の印象。それは映画の主人公のせいだろうか。持っていたものと全然違う。

落ち着いて穏やか、といえば聞えはいいが、何処か力なく気力も無いように見える。

しかもここは病院で、彼が出てきたのは精神科。

「……」

「ここでは話せないなら…場所を、移そうか？」

ゆったり微笑んだ郁。真哉も相喜も、それに頷くしか出来なかった。

ろく　：　ぼくの話

郁の行き付けのカフェに着くまで、一同は無言だった。

美紀代は不機嫌そうに車を運転し、その横で郁はぼんやりと景色を眺めている。後ろの真哉は警戒するように郁と美紀代を観察していて……相喜は席の隙間から僅かに見える郁の頭を見ていた。

郁の髪は、染めているのか白っぽい金だ。映画の主人公も、そんな色。そして、死神も、そんな色の髪をしているのだろう。

「……おい。落ち着いていけよ」

「分かってるさ」

真哉の表情に何かを感じたのか、相喜が声を潜めて言う。

余計なお世話だ、というふうに返した真哉に、前の席で郁が笑った。

「僕、何か悪いことでもしちゃったのかな」

聞こえてたか…、と視線を泳がせた相喜に対して、郁は気にした様子もなく、ただ自分の言葉を述べる。

「僕が何か悪いことをしてしまったなら謝るよ。世の中には結構多いからね……自分と相手の合間にある空間では、全ての言葉が意味を違える可能性を持つから」

まるで台詞だった。けれどもきっと、彼はそれを本心で思っているのだろうと思う。そして、今の自分の言葉が正しく相手に伝わったのか、とても不安に思っているだろう。表情は穏やかだが、視線がどうも定まらない。

「悪いのかどうかは分からないが、お前が僕らの知りたい事を知っていると思って」

「……役に立てればいいんだけれど」

ひとまずほっとした様子の郁に、真哉は僅かばかり目を細める。

彼を見つけた時は、驚きのあまり失念してしまっていたが、彼の姿には年月の流れが全く感じられなかった。あの映画から一年以上は時が経っているというのに、前の座席に乗っている知名矢　郁は、年を重ねているどころか、どこか若くなっているように見える。

それに、ただ役柄のせいかもしれないが、彼特有の溌剌さがない見えない。

「……着きましたけど」

睨むように助手席の後ろを見ている事数分後、不本意そうな声と共に、車が止まった。

「バックうまいっすね、お姉さん」

「どうも」

几帳面なほどに、正確に枠の中央に車を止めた美紀代に、笑って相喜は言ったが、返答は芳しくなかった。相喜の笑顔は苦笑に変わる。

「やぁ、イクちゃん。いつもの場所、空いてるよ」

「ありがとうございます。じゃぁ、いつもの、お願いしてもいいですか？」

「いいよー。暇してたところだしね」

行きつけというのは本当らしく、マスターと親しげに話をした郁は、そのまま奥のベランダにある席まで移動する。

そこで落ち着いた四人。最初に口を開いたのは、真哉だった。

「ところで、知名矢」

と、言いかけたところで、件の郁が口を挟む。

「……それは、僕の兄さんの事だと思うんだけれど…僕でいいの？」

「兄さん？」

「そう。……僕は」

「郁さん！」

遮ろうとした美紀代だったが、郁は目を細めて彼女を制し、そして真哉と相喜に向き直って言った。

「知名矢郁（ちなや かおる）。それは僕の兄の名前で、僕の名前。兄の本当の名前は、篠谷馨（しのたに かおる）。僕は篠谷郁（しのたに いく）」

「兄弟で芸名使いまわし？」

茶化すように言った相喜に、郁は首を左右に振る。

「僕が勝手に兄の名前を使ってるんだ……幸い、僕は兄さんに似てるから…不思議がっている人はいるけど、僕が兄じゃないと思って

いる人はいない」

「じゃぁ、どうしてあんたは、兄の名を騙る」

「兄さんを、探してるんだ」

尋ねられた郁は、こともなげに答えたが、その答えに疑問が浮かぶ。彼が兄の名を使っているのだから、本来その名を使うべき人間がいないのは当然の事だ。どうして、彼はいなくなったのか。

「兄さんは、死んでるよ」

探していると言いながら、弟は、兄は死んでいると言った。

この矛盾をどう説明するのだろう。真哉それを聞こうとした時だった。

「はい、どうぞ。ローズヒップです」

「ありがとう」

空気を和らげるように、マスターがカップを四つ持ってきた。出されたカップの中には、真っ赤な液体。

「ローズヒップかぁ。あの酸っぱい奴だよな」

「うん。野苺みたいな味がするから、好きなんだ」

香りを楽しんでから、口に運んだ郁に、相喜もそれを飲む。

「おぉ…真哉も飲めよ」

言われて真哉も飲んでみたが、正直、味なんてどうでも良かった。

「…それで」

話しを促すと、美紀代に睨まれた。

「……昔の、話になるけど」

と、郁は苦笑交じりに話し始めた。話を聞き終わった後、ここで浮かべるべき表情は苦笑ではなかったのではないか、と真哉は思った。

「この映画ってさ、ホラーなのグロなの」

台本を広げて、そう言ったのは、その映画の主役に抜擢された、最近売れはじめた俳優、知名矢郁（ちなや かおる）だった。

問われたクルーは、それぞれに答える。

「……俺、グロ派」

そう答えたのは、郁の親友役を任された、増田将（ますた しょう）だった。若干、学はないものの、その人の良さは知れ渡っている。郁のように親しみやすい、というよりは、構ってあげたくなるような人間だった。

「私はやっぱりホラーかなぁ」

「うん。でもちょっと、アメリカよりかな。ほら、アメリカのホラーってグロテスクと驚かしの二つでしょう」

「あぁ、そうか！　ハリウッド目指すんだな！」

「違うから」

主人公の幼馴染で恋人役の身奈れいか《みな》が、ほわん、とした様子で答えると、それに頷いて、れいかの友達役である園絵由子(そのえゆうこ)がいう。

そこで将が、ひらめいた！　とばかりに身を乗り出して言ったが、それは直ぐに由子に否定されてしまう。

その様子を見ながら笑っているのは、監督兼カメラマンの影平孝(かげひらこ)作(うさく)だった。

「ほら！　そろそろ撮るぞ！」

「はーい」

影平孝作という男は、基本的に一人で仕事をしてしまう。持っているのはカメラ一つだけ。だから、同じシーンを何度も違う角度から撮り直すことが続く。

この映画だって、大分前から取り始めているというのに、まだ半分しか出来上がっていない。だが、それでも飽きないのは、このメンバーだからだと思っていた。

そして、今回は特別にお手伝いがいる。

「イッくん、そっちのレンズ取ってくれ」

「あ、はい！」

郁の弟。芸名に弟の文字を使っているせいで、字で書くとややこしくなってしまう。孝作は初め、イクの事をカオルと読んだり、カオルをイクと読んだり、はちゃめちゃだった。だから、弟の事をイックんと呼び、兄の方をカオルと呼ぶようにした。

現場にいるからと言って、イクは芸能界に興味がある訳ではない。ただ、兄の仕事を見学しに来ている内に、手伝いをするようになっただけだ。

兄の仲間達はみんな人がよく、それにイクには優しかった。良く五人で食事に行ったりもした。泊まりの撮影の時だって、経費でイクの宿泊代も出してくれるほど、イクはメンバーに好かれていたし、一員だと認められていた。

学校に行きながら、そんな生活をすること、一年。夏休みを利用しての長期の撮影に、イクは当然の様について行った。

「この映画、親父の代からやってるからな」

現場に着くまでの移動で、孝作がカメラの手入れをしながら言った。車を運転しているのは将だ。徐主席に乗っている由子に、しきりに注意を受けている。どうも将は片手運転の癖がついてしまっているらしい。それに、オートマチックの車なのに、マニュアル操作だと勘違いして手足が動いているようだ。

にぎやかだな、と思いながら、イクは隣で居眠りしている兄を見上げた。れいかも眠そうにしている。

こんなでは孝作の話相手はイクしかいない。

「イッくんの兄ちゃん達が子供のころ、屋敷に迷い込むってところを撮ったのが親父。それで、大人時代を撮ってるのが俺」

そう言ってカメラを回しているまねごとをした孝作に、イクは頷く。

本来なら、ここでカメラを回しているのは孝作の父親で、その手伝いをしているのが孝作。そうだったんだろうと、イクは思った。

「親父があんなにならなかったら……」

呟いた孝作。と、ぱちりと郁が目を開けて口を開いた。

「あれは事故じゃない」

「カオル」

「あれは事故じゃない。影平さんは殺されたんだ」

その呟きに、寝かけていたれいかは目を覚まし、前に乗っていた将も由子も、ぴたりと静まる。車の中の異様な雰囲気に、イクは息を止めそうになった。

「その話、無しだって言っただろう」

「ごめん」

眉を寄せた孝作に謝って、郁はまた目を閉じる。それをきっかけに、車内の雰囲気がまた元の通りに戻る。

一応の学生組を引率する形の孝作は、この中では父親的存在だった。年齢はそれほど離れている訳ではないのだが。

やがて景色が変わり、辺りは木で埋め尽くされる。が、道路はそれなりに整備されており、まだ人が行き来している場所なんだと分かった。

そして、いきなり場所が開けたかと思ったらば、そこにはこじんまりした町…いや、村があった。

誰が来るでもないそこには民宿なんてあるはずもなく、彼らは昔と同じように、その村の公民館を宿として使う事になっていた。

見た瞬間、閉鎖的な場所なのではないかと感じたイクだが、村の人々は意外とフレンドリーで、彼らが着く前から色々と準備をしていたようだった。

車から降りて、何やら初老の男性と話している孝作の横を通って、イクはカオルについて公民館の中に入る。

手入れはされているが、やはり古い。しかし、その古めかしい香りは嫌いではなかった。

今日は休もう、と言う事で、撮影は明日からにして、孝作はイクを外に連れ出して指をさす。

「この坂をずっと上に行ったところにある屋敷が明日からの撮影場所なんだ。…一本道だから迷わないとは思うけど、ここいらは雰囲気あるからな。夜は出歩かない方がいいぞ」

「あ、はい…」

ホラー映画の撮影について歩いているイクだが、彼は自覚できる程に怖がりだった。それがただの怖がりなのか、そういうものに敏感なのかは判断できないが、孝作もカオルも、そんなイクを気遣っている。

他のメンバーはそれほどでもないが、一応、気を紛らわせるような話を振ってくれる。

イクは彼らといるのが好きだった。楽しくて仕方がなかった。

古い公民館でビクビクしながら、無事に夜を明かしたイクは、ついにその屋敷の前に立っていた。

「だいじょうぶ…？」

れいかに声をかけられて、イクは抱えた三脚を取り落としそうになりながら慌てて頷く。

その屋敷の朽ち果てた姿に驚いて、茫然としてしまったようだ。本当に中に入れるのかと不安に思いながらも、最後尾を歩く。

床は怪しげな音を立てるが、腐っていて誰かが踏み抜いた…なんてことにはならなかった。

「……」

「イク、お前本当に大丈夫か？　怖いなら下まで送ってくぞ」

身を縮めてしょぼしょぼと後ろをついてくる弟のあまりの怯え具合に、たまらずカオルが声をかける。まだ、撮影も始っていないのにだ。

イクは首を左右に振って、しかし、挙動不審に辺りを見回しながら歩きだす。

「大丈夫かしら」

「さぁ…でも、本人は大丈夫らしいぞ」

由子とカオルの心配をよそに、イクは自分を奮い立たせて孝作の後をついてゆく。自分以外はたいして怖がってもいない。自分だけが怯えていることが情けない。

その屋敷の廃墟は、ところどころが崩れていたりずれていたりしているようで、隙間から光がさしていた。

廃墟のわりには明るいのだが…イクにはどうしても、その光の温かさが分からなかった。時間が止まっているような、辺りの景色が氷の様に冷たく見える。

長くは居たくない。そう思う場所だった。

「それじゃぁ、とるぞー！」

と、イクの怯えを吹き飛ばすように言ったのは、将。イクは気合を入れ直して、孝作のサポートをしようと一歩を踏み出した時だ。

ギィ…

と、イクの視界の端で、何かが揺れた。

初めての体験ではない。だが、雰囲気に呑まれかけていたイクに

とっては、足を止めるのに十分な光景だった。

ギィギィと柱に結ばれた縄が、揺れる体の重さに耐える音を響かせる。揺れているのは小さい体で、男か女かは分からない。

ただギィギィと揺れて…いや、揺れている訳ではない。

『おのれぇ…おのれ、＊＊＊…許さん、許さんぞ、＊＊＊…この恨み…必ず、必ず…』

「……っ！！」

吊られた小さな体の、その両足にすがる様に、若い男が一人、上手く聞き取れないが誰かへの呪詛の言葉を吐き出していた。

ここにいる訳ではないのか、彼はこちらに気が付いていないようだ。

服装は着物。子供の方は単純に時代劇でも良く見るような着物を着ているが、男の方は少し違う。まるで神主か何かの様な、深い青の袴に白い着物を着ている。

『この身…幾重に裂かれようと…この恨み……』

その血が絶えるまで…忘れはしまいぞ…

「イク！」

兄の声に、イクは肩を跳ねあげて振り返った。小走りにやってきたカオルは、イクの肩に腕をまわして、グイッと力任せに外に連れ出す。

「だっ、大丈夫だよ！」

屋敷の外に連れ出されたあげく、三脚も取り上げられたイクは慌ててカオルに反論するが、カオルは首を左右に振って、三脚の角で軽くイクの頭を小突く。

「大丈夫じゃなかっただろう。疲れてるんだよ。下で休んでろ」

「つ、疲れてるかもしれないけど…だ、大丈夫だって！」

「……駄目だ。下に行くのが面倒なら、ここで待ってろ」

「大丈夫だってば！」

「駄目だ」

押し問答の結果、結局精神的にも肉体的にも力負けしたイクは、屋敷の門であっただろう場所でしゃがみこむようにして兄らが戻ってくるのを待っていた。

その間、辺りの景色を眺めていたのだが、この少し上に、まだ何かあるようで、こちらと同じように朽ちた様な黒い瓦の屋根が見えた。

暇つぶしがてらにそちらに行こうと道に出たイクだったが、砂利とも土とも言えない道を登って行くうちに、坂とは別の、下に降りる階段を見つけた。

その先にも、少し大きめの屋敷が見えた。

廃墟だらけだ…。と、上に行くのはやめて、その石を積んだ階段を下りてゆく。

こちらは比較的しっかりと門が残っていて、庭園だった名残の場所には、好き放題に枝を伸ばした背の低い木と、草に紛れるように花が咲いていた。手入れなどされてはいないが、自然のままになっているのが、それなりの美しさを表している。

が、そう思えたのは門の少し先まで。

その屋敷は、別の意味で、イクを拒んでいるようだった。

真黒に朽ちたその屋敷は、一階の骨組みだけが辛うじて残っているだけ。焼け落ちた、という表現をそのままに再現したかのような有様。

『すまない…すまない…』

風に乗ってきたかのように、かすかに聞こえた声に、イクは声の正体を探す。

しかし、そこには誰もいない。何もない。だが、声だけは聞こえてくる。誰かに謝り続ける男の声だ。

強くなったり弱くなったりする声を頼りに、目を瞑って歩きだす。声を手繰って行ったその先で、イクの目の前が一瞬で真っ赤に染まった。

驚いて目を開けると、イクは焼けた屋敷の玄関先に立っていて、そして、目の前には、燃える屋敷と、その奥の間にこちらに背を向けて立っている男。

兄らがいる屋敷で見た男ではないが、同じような格好をしている。袴の色が青ではなく白なだけ。

すまない…。

と、呟いた男の手から、刀が滑り落ちて、まだ燃えてはいない畳みに突き刺さる。特殊な刀の様で、長さは標準並みだが、刃の幅が広い。包丁に似せた刀のようだとイクは思った。

屋敷が燃えて、瓦礫が落ちても、男はそこで立ったまま、『すまない…』という言葉を繰り返し続ける。

イク自身は全く熱など感じていなかった。逆に冷たさを感じるほどだ。

ここから立ち去らなくては…と、一歩後ろに下がった瞬間だ。大した音も立ててはいないのに、男がグルリとこちらを向いた。目を見開いて、取り落とした刀を手にしたかと思えば、人間ではありえない、瞬間移動としか言いようのない速度で、イクの目の前に現れる。

腕を高く振りあげた状態で。

『まだ生き残りがいたのか…』

『すまない…』と、呟いていた男とは思えないほどの、低く掠れた声で、男は刀を振り下ろす。

逃げなければ！　と、思ったイクは、後ろに下がるのではなく、前に走り込んだ。そして男を突き抜ける形で、しかし、足元にあった焦げた骨組みに躓いて、瓦礫の中に突っ込むように転ぶ。

「……はぁっ」

思わず息を止めていた。

顔を上げるとそこは、初めと同じ、焼け落ちた屋敷跡。両手も両膝も黒くして、イクは立ち上がる。

難儀して奥に進んでみると、その黒い畳みには、辛うじて刀の刺さった痕が残っていた。

「そこで何しとるがね」

「！！」

何を思っていたかは分からないが、その後を眺めていたイクの背後から、しゃがれた声が聞こえて、イクは慌てて振り返る。

「そこのおったら危ないがろう」

イクが転んだ物音に気がついたのか、何かの包みを抱えた老婆が、庭の方からこちらを見ていた。

「あ、す…すみません」

瓦礫を飛び飛び、出ていくと、老婆は細い目でイクを見上げる。腰が曲がっていて、老婆の身長はイクの胸辺りまでしかない。

「悪いことはいわんから…あんたはここには近づかん方がいい」

「え？」

どこか悲しそうに言う老婆に、イクは食い下がる。もしかしたら、下の方の屋敷であったことも知っているかもしれない。

だが、老婆は詳しくは教えてくれなかった。ただ、忠告だけを残して下の村へ帰って行った。

「あんた、ここん家の最後の当主に似てるがよぉ。悪いことは言わんから、早くお帰り。…遊びできたんなら、早くお帰り。真っ直ぐにここから出ていきんさい…上の屋敷も、下の屋敷も…行くんでないよ」

老婆についていくことができなかったイクは、もう一度屋敷を振り返る。そして、今朝がた鏡で見た自分の顔を思い出す。

最後の当主に似ている…？

幻のように見えた、あの刀の彼がそうだというのだろうか。炎のせいで黒くしか見えなかったが。

…いや、違う。今はそれどころじゃない。

あの老婆は言った。

上の屋敷にも、下の屋敷にも…行かないで、帰りなさい。と。

下の屋敷は、そうだ、今兄達が撮影をしている。

「兄さん…！？」

イクは分かっていた。自分と兄が、双子かと見紛うほど似ているのを。兄と自分の違いは、ただ年齢の差だけだということ。

すなわち、自分が焼けた屋敷の当主に似ているなら、兄はもっと、その当主に近い顔立ちになるはず。

似ているから、早く帰れと言われたならば…危ないのは、兄で。

そういうオカルトじみたことに興味はあれども、信じていないのがカオルだ。

今の事を言っても、何も信じてくれないかもしれない。けど、それでも、イクは転がり落ちそうになりながらも坂を走る。

無事だったらいい。何もなかったらいい。自分で自分を笑うだけだから。

でも…。

「兄さん！！」

散らばったフィルムやカメラのレンズ。倒れた三脚。

部屋の隅で並んで座らされている由子とれいか。更に奥に行くと、壁に血飛沫を浴びせて倒れている将。

慌てて携帯を探って画面を見るが、ここは圏外。知る限りの知識を総動員して止血をしたイクは、今度こそ本当に坂を転げ落ちながら、下の村まで降りていき、そして近くの民家に飛び込む。

イク自身、混乱して何をどう話したか覚えていないのだが、とりあえず救急車が呼ばれ、警察も来た。

新聞にも取り上げられる事件ではあったのだが、人の記憶には残っていない。

「孝作さんも…屋敷の裏の方で見つかったよ」

ぼんやりとした風に言う郁に、真哉は目を細める。

「でもどうしてかな…兄さんだけいなかったんだ…おかしいよね。ちゃんとカメラで撮れてたのに…最後、兄さんだったのにさ…あの黒いのって誰かなぁ…僕の兄さん、返してくれないかなぁ」

兄さん…。と、呟く郁が、すまない…。と、呟いていたらしい、当主らしき人物と重なる。

郁の心中を察してか、声をかけられずにいる相喜を横目に、真哉は口を開く。

「それで。お前の兄以外は全員生きてるのか」

「…おい」

真哉とて、郁の兄が死んだかどうか分からないのは理解している。しかし、とても生存しているとは考えられない。

相喜が眉を寄せ、美紀代が鬼の形相で真哉を睨むが、当の郁は相変わらずの気だるげな柔らかい笑顔で頷いた。

「うん…生きてるよ。時々連絡くれるから…でも、会えるかどうかは…分からないなぁ」

生きているが、会えない。どういう事だろうかと真哉が目を細める。

「連絡先、教えてあげる…いきなり行くのは、やめた方がいいから……僕の紹介って言えば、多分、会えるよ」

そう言って、美紀代が差し出した紙に、三つの連絡先を書く。

「一つ足りない」

確か、郁の兄の他に、現場に居たのは、男女それぞれ二人だ。紙には四つの連絡先が書かれているべきだが…。

「由子さんと将くんは…一緒にいるよ」

「…そうか」

差し出された紙を受け取って、真哉は立ち上がる。続いて郁も立ち上がって、例の笑みを見せる。

「病院まで…送ってくよ」

「……」

そう言えば、彼を見かけた折、そのまま彼の…いや、美紀代の運転する車でここまで来たのを忘れていた。

真哉は礼も言えずに郁の後ろについていく。

会計を済ませて出てきた美紀代に、先に出ていた相喜が声をかけた。

「なぁ、お姉さんさぁ…あいつじゃなくて、あいつの兄貴が好きだったって口だろ」

「！」

いきなり話しかけられ、しかもそれが図星だったことに目を見開いて、美紀代は相喜を振り返る。

相喜は口元に笑みを浮かべたまま、そんな彼女を追い越して軽く手を振った。

「別に悪いってわけじゃねぇよ。…ただ、結局……まぁいいか。なんかお姉さん分かってそうだしな…。あいつ自身を大切にしてやれよ」

「……あなたなんかに言われなくても！」

「ははっ。怒っても綺麗だね、お姉さん」

「！！」

茶化すような相喜の良いように、完璧にへそを曲げた美紀代は、ずんずんと車に向かって行ってしまった。

相喜は肩をすくめて、その後ろについていく。真哉に、遅い！と叱られながら車に乗り込んだ。

車中は無言で、病院に降ろしてもらった時だって、真哉は一言も礼を言わなかった。代わりに相喜が真哉の分まで笑顔で頭を下げる。

「さて…帰るかぁ」

と、背伸びをした相喜の後ろで、何や真哉が電話を掛けはじめた。まさか…と、思った相喜の予感は的中していたようだ。

「これから行くところがある。お前は歩いて帰れ」

「えぇっ！？　お前、ケガ人を放り出していくのかっ！？」

「……」

眼帯に覆われた片目を指さして、大げさに言う相喜に、真哉は心底煩そうに目を細める。

「…じゃぁ、付いてくるつもりか」

無理やりにでも置いていくつもりはないらしい。

相喜は親指を立てて、にかっと笑顔を造る。

それにため息をついて、真哉は車のロックを外した。

なな：コトハラ

鼻歌交じりで、車に置いてあったＣＤの歌詞カードを読んでいる相喜（あいき）に、真哉（まさや）は心の中で溜息をつきながらブレーキを踏む。

自分が巻き込んだのか、それとも彼が巻き込まれにきたのかは、まだ判断できないが、相喜は今、真哉よりも確信に近い場所にいる。

あのＤＶＤの最後を、彼は知っていて見たのだから。

「……おい、青になってんぞ」

「分かってる」

視線は歌詞カードに向けたままで、顎で前進を絆す相喜に、真哉はイラ立ちをそのまま、アクセルにぶつけた。

赤信号の間に、短く会話をした様子だった真哉が尋ねたのは、郁から受け取った連絡メモの一番下にあった増田将（ますだしょう）と、彼と共にいるという園絵由子の家だった。

正直、拒否されることを承知で連絡を入れてみたのだが、快く承諾してくれた。…増田将の連絡先と書いてあるのに、電話口の声は女性、つまり園絵由子だったことには少々引っかかりを覚えたが。

しかし、実際に、彼らの住居についてみると、その建物は家、というより…。

「なんか、療養専用の施設っぽくね？」

「……家だというなら家だろ」

真っ白い家に、少し高めの塀。だが、家の全体はプライバシーを笑い飛ばすかのように、ほとんどが大きめの硝子窓が取り付けてあり、庭先にはベランダも設置されている。

塀も要所は白い塗り壁だが、ほとんどは黒い華奢な飾り格子がはめられていて、緑の垣根と、花壇、そして芝生が見て取れる。

「花が少ねぇなー…いい庭なのに」

「それは本人達に言え」

相喜の呟きにインターフォンを鳴らしながら、真哉は、真っ白な家には不釣り合いな、真っ黒い四角い玄関の扉を見やった。…そこだけ黒なのが、異様に思える。

すると、直ぐにその扉が開いて、中から黒い長髪の女性が出てきた。

「貴方が、さっき電話してきた人ね？　イッくんから話は聞いたわ。…まさかこんなに直ぐ来るとは思ってなかったから、お茶ぐらいしか御馳走できないけれど…」

「いえ、お構いなく」

「えぇ。逆に俺が構いたいです。庭を」

「？　庭？　えぇ、いいわよ？」

「……相喜、お前、邪魔しにきたのか？」

真面目な顔をしてそんなことを言う眉を寄せる真哉に、相喜は白々しく肩を竦めて口笛を吹く様に斜め上を見上げる。

そんな二人の様子に小さく笑った由子は、二人を招き入れる。玄関の先は直ぐにリビングになっていて、大きな窓から、そしてほぼ吹き抜けになっている二階の窓からも日が入ってきており、とても明るかった。

「お客さん何て、イッくん達以外じゃ、はじめてかもね。あぁ、そこ、庭の方の椅子に座ってくれないかしら」

「えぇ。…本当にお構いなく」

「いいえ。これぐらいさせて頂戴。…たぶん、私は何も答えられないし、将くんも、答えられないと思うから」

と、微笑んだ由子に、相喜は椅子には座らず、庭を眺めながら、顎に手を当てる。

精神薄弱というか、ぼんやりした様子だった郁を見たせいなのか、それとも彼が体験した話を聞いたせいかは分からないが、相喜の中の彼女は、もっとやせ細っており、それに比例して表情も暗いものだと思っていた。きっと、真哉もそうに違いない。

が、実際の彼女は実に健康的だ。まぁ、多少影のある表情を浮かべることがあってもだ。健康美に溢れる社交的な女性には変わりない。

「……想像していたよりも、ずっと明るい方で良かった」

「それはどうも。…そうね、こう言っては失礼だけど、皆の中で一番“まとも”だと思うわよ。その代わり、一番何も分からないんだけれどね」

紅茶を用意する彼女に声をかけたのは真哉。相喜は『それ、本人に直接言うのかよ…』と、内心あきれ顔だったが、それが真哉という人間だ。由子も機嫌を害した風ではなかったので、これで良しとするべきだろう。

「まぁ、聞かれる前に答えてしまうとね、私はもう、全く、あの時のことを覚えてないの」

真哉の前にカップを置いて、由子は微笑んだ。困ったような、すまなそうな笑み。…その表情に見覚えがあって、真哉は不自然でない程度に視線をそらす。

母親もそうやって笑っていた。自分に向ける笑みはいつも、困ったようなすまなそうな、悲しそうな笑みだった。

と、カタッと音がして、吹き抜けになっている二階部分から、寝起きと思しき男が顔を出していた。

「あっ、将くん？　お客さんよ！」

「うん」

少し慌てた様子で、由子は真哉と相喜に手を向けて、欠伸をする将に言う。

彼女の掌に合わせて二人を見た将は、気だるげに階段を下りてく

ると、すっと、真哉に何かを差し出した。

それがあまりに自然な行動だったので、真哉は握手でも求められたのかと思って、手を出しかけてしまった。だが、将の掌には、既に何かが収まっている。

それは…。

「将くんっ！？」

肩を跳ねあげた由子が、彼の手からそれを奪い取る。将が持っていたのは果物ナイフだったのだ。

ただし、刃の向きは彼自身だったが。

「失敗したからやり直しにきたんだろ？」

真哉が眉を寄せて不快感を現すような、暗い笑みを向ける将は、かくんと首を傾げる。少しばかりサイズの大きいシャツの首筋から覗く傷跡。例の事件の時の傷だろうか。

壁に血飛沫を残すほどの傷だ。相当深い傷だったに違いない。

「何言ってるの、将くん？　駄目よ、人にこんなもの向けたら…」

「人？」

一度、由子の顔を見てから、将はもう一度、真哉の顔を見やる。

人間か否かを確認するためだ。

「……人外扱いされたのは初めてだ」

しかも初対面の相手にだ。

「お前って昔っから無機物っぽいんだよ。その仏頂面が」

「うるさい」

ぼそぼそと話している真哉と相喜の様子に、しかし将は首を捻る。

「ふうん、人間だったのか…」

と、更に確かめるように伸ばされた手が、すっと真哉の頬に触れた。

これにはさすがの真哉も驚いて、息を詰めて体をこわばらせた。

激しく動揺した時特有の、彼の無表情さに相喜は、将の手を振り払

ってやろうとしたが、将はと言うと、何が納得いかないのか、両手で真哉の頬を左右に引っ張った。

「なっ、何なんだ、あんた！」

その暴挙に一瞬で我に返った真哉は、慌てて、将と距離をとる。謝る由子に、将はやはり納得いかない様子だ。

「……人間…っぽいな」

「だから人間だって言ってるだろうが！　何が納得いかないんだっ！」

落ちつけよ、と半笑いの相喜に止められながらも、声を荒げた真哉に、将はじっと彼の顔を見つめて言った。

「だってお前、アイツ喰ったじゃねぇか」

シン…と、辺りから音が消えた様な錯覚。足元に、氷の様な風が這ってきた。

「…将くん？　何の話をしてるの…？」

君の悪い薄笑いを浮かべる将に、由子は平静を装って尋ねる。彼女だって分かっているはずだ。おかしいぐらいに冷えた空気と、この雰囲気。

「何って……」

知らないのか？　とでも言いたそうな笑みを浮かべながら…しかし、将はふと、表情を消して明後日の方向を見やる。

そうして、ふらふら…と、真哉と相喜の間を押しのけるようにすると、硝子戸をあけて、庭へと出て行ってしまった。

まだウッドデッキまでなら良かったのだろうが、裸足のままで、芝生の上に出る。

「まただわ…」

と、呟いた由子に、相喜は視線だけを向ける。

きっと、彼の目の前に蝶でも飛んでいれば、彼の行動には全く違和感は覚えないのだろう。何かを追うように、ふらふらと、庭を歩いている。

「……」

薄ら寒いものを感じながら、将の様子に目を細めた真哉。すると、いきなり目の前が真っ暗になった。

「！？」

そこには誰もおらず、何もない。

何かが揺れているような音がする。きいきいと鳴っている。それに鎖の音が混じった。若者が身につけているような可愛い代物ではない。もっと重く、冷たい鎖の音。

『恨むなら、私を恨め』

酷く冷めた声だった。しかし、どこか聞き覚えのある声。

『許さん…許さんぞ……』

地の底から這ってくるような、血の底から湧きあがってきた様な声。

その声は続けた。

『湖　都　原　アぁ　アァァぁ　あ　アぁぁ　ッ！！』

咆哮と、衝撃と、開けた視界に、真哉は息をのんで目の前の男の顔を凝視する。

それは将だった。彼のはずだ。

「おいっ！？」

「将くん！！」

椅子を倒して、テーブルを押しのけて、鬼の様な形相の将に馬乗りになられているこの状況が理解できない。先ほどまで、へらへらと笑って、頼りなさげに庭を歩いていた男が…何故？　意味が分からない。

『「コトハラ」』

将は言った。確かにそう言った。こちらは名乗っていなかったのに。

その表情を見て、力の籠った将の腕に、真哉は恐怖に身構えていた体の力を抜いた。

ふっ、と消えた感情という感情に、相喜は『ヤバイ』と、多少乱暴に、力づくで将を真哉から引き離し、そして突き飛ばす。

バリンッと、音を立てて、転げた彼の後ろにあった硝子の扉が外側へと飛び散ったが…。

「大丈夫、将くん！？」

「……」

ぐったりと倒れている将の体は、突き飛ばされたとはいえ、一切、硝子戸に触れてなどいなかった。由子も訳が分からない様子だったが、今は扉の硝子よりも、将の行動の原因を探る方が先だ。

と言っても、とうの彼は完全に意識を失っているようだが。

「おい……おい、確りしろ！」

何も見えない。何も聞こえない。何も感じない。

全てを全力で受け流す時特有の、真哉の虚ろな表情に、相喜は彼の肩を揺さぶり、少し強めに頬をひっぱたいた。

「……あぁ、大丈夫だ…」

「どこがだよ、馬鹿ったれが」

真哉への怒りで眉を寄せた相喜だが、ズキリと眼帯の下の傷が痛んだ。

殴られれば痛い。それは当たり前のことだ。だが、真哉はそれを受け止めきることができない。いや、人より、痛みには耐性があるはずだ。

それ故に、彼は受け流す方法を身に付けた。立ち向かうことを放棄することで。

何事もなかったかのように立ち上がった真哉に、由子が申し訳なさそうな、しかし戸惑った目を向ける。

「いつもなら、こんなことないのよ…」

彼女はそういうが、彼女の言う“いつも”とは、この状況には当てはまらないのではないだろうか。

将にとっての“いつも”とは、明らかに由子と二人でいる状況のことであって、今日の様に見知らぬ客人が訪ねてきた時ではない。

しかも、彼は実に奇妙なことを言っていた。

まるで、真哉をどこかで見たことがあるかのような。聞き間違いでなければ、真哉が誰かを喰ったとか…。

「真哉。…今日はおしまいだ。帰ろうぜ」

気になることは多々あるが、今は将にしても、真哉にしても、休ませることの方が先決に思えた。

相変わらず、ぼんやりと、しかし、将を睨めている真哉の肩に手を置いて、相喜は将を担ぎあげて、由子の案内のもとで二階へと上がる。

『コトハラ』

割れた窓から、氷よりも冷たい風が流れてきたような気がした。

真哉はじっと、そこを睨む。

死神だなどと、非科学的なことは全く信じていなかった。今だって、そうだ。“死神”だなんて、馬鹿げている。目に見えないとしても…それが死神であるかどうかなど分からないのだから。

はち　：　予感

何度か、相喜(あいき)に『大丈夫なのか？』と気遣われながらも、それを邪険にもほどがある態度で振り払って、帰宅してから数時間。

真哉(まさや)はリビングの椅子に腰かけたまま、ぼんやりとバラエティー番組を映し出しているテレビを眺めていた。

時間はもう夜中の十一時を過ぎている。

寝ぼけ眼で起きてきた真沙(まさ)は、爆笑の渦が起こっている画面を無表情で眺めている真哉に気がついて、目をまん丸にする。

そして、声をかけるべきか否かを迷った結果、黙って横に座ってみた。

「……」

「……なんだ、まだ起きてたのか」

真沙が音もなく横に立っていたことに驚きもせず、真哉は疲れた様な、しかし柔らかい笑みを浮かべて彼女を振り返る。

「う、うん。起きてたよ…」

確り寝ていたのだが。

最初に共に暮らし始めた時も、なんだかこんな微妙な雰囲気で、会話もぎこちなかったな…。

と、真哉はしかめっ面をしながら、ゆらゆらと揺れて椅子に座っている真沙の頭に手をのせる。ぴた、と動きを止めたかと思えば、抑える真哉の腕力に逆らい、ぐぐぐ…と左右に動きだす。

…いきなり『俺はお前の兄だ。だから一緒に暮らそう』なんて言って現れた男についてくる妹が、心配でないわけがない。

実際に真哉は兄であったし、そういった下心など微塵もなかったから良かったものの…。

「さっさと寝ろ。また部活なんだろう」

「うん…」

真沙は頷くが、立ちあがろうとしない。手で抑えているからか？と、手をどけても、そこから動かない。またゆらゆらするだけ。

「…どうした？」

まさか、自分の不在時に何か起こったのではないかと思ったが、どうやら違うようだ。

「お兄ちゃん、元気ないなぁって…大丈夫？　あんまりお出かけとかしないし…疲れてない？」

「……大丈夫だよ」

確かに、自分は外出しない。それは認める。

だが、たまに外出した結果、妹に心配されるほどだとは思っていなかった。

内心、ため息交じりに、しかし心の底から真沙を安心させる様な笑みを浮かべて、真哉はもう一度真沙の頭に手をのせる。

そうして、唐突に理解した。

真沙にとって、家族は兄である真哉一人だけで、同時に真哉にとっての家族は、妹である真沙だけなのだ。心配するのは当たり前。

「寝てたんだろう。早く寝ないと、また頭痛くなるぞ」

「…うん！　私寝るね！」

真沙が頭痛を訴える時は、だいたいが寝不足。

体の不調を真沙に訴えたことのない真哉は、彼女にとったらば厄

介この上ない存在なのだろう。…真沙は直ぐに体調不良を真哉に報告するが、真哉は真沙が気付いて声をかけてやらねば、そのまま何事もないかのように偽装して生活を続ける。

幼い記憶の中で、おぼろげに覚えている。

その日の真哉の手はとても熱かった。なのに彼は平気な顔をして笑っていた。そして、その日の夜、高熱で病院に運ばれるまでになった。

真哉は隠そうとしているようだから、敢えて聞きはしないが…真沙は知っていた。

自分と彼が離れて暮らしていた原因を。母親が何故、まるで父親は死んでしまって、兄は初めから存在しないかのように振る舞っていたのか。知っていた。

親戚で集まった時に、聞こえてくるからだ。ひそひそと、こそこそと。色んな人が話している。

『止流（トナガ）の人間と夫婦になったのがいけなかった』『あれでは兄が浮かばれない』『あれほど止めたのに』『迷信だと思って…』

と、こそこそと。だがそれは年配の親戚達が話しているだけで、母親と同年代、もしくはもっと若い人たちは、単純に母親を励ましてくれていたように思えた。

そうして、自室の扉を閉めた時に思い出した。

真哉のあの無表情な顔を見た時に、思い出しかけて、なぜか不安になってしまった訳を。

真沙は真哉の顔を知っていた。…幼いころの記憶ではなく、今の彼の顔を、真哉を直接見たわけではないのに、知っていた。

母親の実家に行った時に、一回だけ見てしまった。

仏間の奥の方にあった、古い本。紙を紐で束ねた程度のそれと、無造作に重ねておいてあった写真に、彼はいた。

真哉に良く似た顔で、しかし、真哉よりももっとずっと冷たく鋭く、刺す様な怖い表情をした人。

良く見る前に、親戚に見つかって、軽く怒られてしまったのだが…。

入ってはいけない部屋だと言われているらしいが…それほど母親の実家にいたことのない真沙にとっては、その部屋に何の意味があるのか分からない。

真哉には、あんな怖い顔をしてほしくないな。

そう思いながら、真沙はベッドにもぐりこんだ。

……次の日、予想もしていない事実を突き付けられるだなんて知らずに。

寝ぼけ眼のまま、自分で用意した朝食のパンをかじりながら、真沙はニュース番組を眺めていた。

いつもならば真哉が起きているのだが、どうやら今日はまだ寝ているらしい。

この数日、家の外に出かけていたから疲れているんだろうな、と、納得しながら、少しばっかり焦げたトーストを、明らかに苦いコーヒーで流し込む。

真哉の様に上手く作れていないのは良く分かっている。

普通にしていても、真哉の部屋にまで音は響かないだろうが、なるべく音をたてないようにして、けれども、小声で『いってきます』と、呟いて家を出た。

今日の部活は何があるだろうか、と、門を閉めて道路に出た時だ。

道の向こうに、日当(ひなた)の姿を見つけた。

「先輩！」

と、声をかけると、彼は明らかに驚いたように勢いよく振り向く。休日としては朝が早い時間に、よく通る大きな声で呼ばれれば誰でも驚くだろう。

「あ、真沙ちゃん。家、こっちなんだ？」

まだ驚きの余韻を残しながらも、日当は苦笑を浮かべて当たりを見まわすようにする。

真沙はそれに元気よく頷き、『そこが私の家なんですよ！』と、今しがた出てきた自宅を指さした。

新しい感じの家だねー、なんていう会話をしながら、学校に辿りつき、部室前の廊下に続く曲がり角を曲がった時だ。

「あっ、先輩、まーちゃん…」

先に来ていたらしい永士（ようじ）が、壁から背中を離して、何やら複雑な表情を浮かべて二人を見た。

世間話をしていたままの笑みを浮かべたまま、真沙も日当も彼を

見やる。

「あの……」

と、口を開いて、言葉を続けられずに俯く。その表情は苦痛にゆがんでいるようにさえ見える。

「どうしたの？　具合、悪いの？」

駆けよる真沙に、永士はゆるく首を左右に振って『違うんだ…』と、弱く言う。

すると、部室から葉奏（はかな）が出てきて、部室の前にいた三人に目を丸くする。その表情は、ただ驚いているだけではない。彼女の表情は蒼白で、とっさに言葉が出てこないようだった。

「どうしたんです？　先生…」

これはただ事ではないと思ったのだろう、日当が眉を寄せて問うが、葉奏は笑みを取りつくろい、手を振った。

「い、いいえ、何でもないわ。ちょっと、先生、用事が出来たから、今日は部活、どうしましょうかって、相談してたの」

相談って、誰と？　と、思った矢先、部室から相喜が出てきて、彼はいつも通りの調子で、三人をぐるりと見やった。

「お前ら、休みなのに真面目だなぁ…しかし、残念なことに、今日は部活なし！」

両腕を胸の前で罰点を描く様に交差させて、相喜はいかにも残念そうに眉を寄せた。

「なんでー！？」

文句を言う真沙に、彼はいかにも不本意そうに腰に手を当てて説明する。

「葉奏先生、今日は急用ができてな。そして、この俺にも急用があって…職員室も用務員室も空っぽになっちまうんだ。警備のおっさんはいるけどな…あの人達、結局部外者だからさぁ。学校でなんかあった時に直ぐに対応できないんだよ。……というわけで、監視員の先生がいなくなるので、無理！」

悪いな。と、笑顔を向けて、先に職員室に向かってしまったであろう葉奏を追いかける相喜。

真沙達、三人は、彼らの後ろ姿を眺めながら、どうしようかと顔を見合わせた。

「…どうしよっか？」

部室は使えないようだが、このまま帰るのも味気ない。

日当も永士も同じことを考えているようで、微妙な沈黙の中、どうして時間を潰すべきかを考えているようだった。いや、永士はもっと深刻そうな表情であったのだが、そういったものに鈍感な真沙は、怪訝に思いながらも、思い出した良い暇つぶしに表情を輝かせた。

駅前に、よく当たると評判の占師がいた。前々から行ってみようと思っていて、今まで忘れていたのだ。

それを話すと、二人とも快く了承してくれた。

「お店にまで入ったことないなぁ…ネットぐらいだね、僕は」

と、賑やかな駅前なのに、なぜかそこだけひっそりとしている小さな店の前で、日当が腕を組んだ。

「僕は朝にテレビでやってるやつぐらいですよ…」

と、気が引けている様子の永士が小さく呟く。

未だに、雑誌で取り上げられるぐらいに評判だというのに、扉の前には全く人が並んでいなかった。今までだったら、そういった類の店の前には、行列が出来ているものなのだが。

「お休みかなぁ？」

そう言いつつも、そっと扉を押してみると、チリリン、とベルが音を立て、軽く扉が開いた。店内は占の店と言うよりは、洒落た喫茶店の様で、日の光が降り注ぐようで明るかった。

実際、占待ちの人達の為に、カフェの様な造りにしているそうだ。

「いらっしゃい。どうぞ、待ってたわ」

にこり、と、穏やかに笑った女性こそ、件の占い師。テーブル席ではなく、カウンター席には、既にカップが二つ用意されていた。

が、一つ足りない。やってきたのは、三人。

真沙が最初に入り、次に永士、そして日当がやってきた時、彼女は『あら？　ごめんなさい』と笑って、日当の分のコーヒーを準備する。

「今日は二人だと思っていたけれど…見逃しちゃったかしらね」

そういう彼女に永士は苦笑を浮かべて、日当は自分に出されるコーヒーを受け取る為に、手を伸ばした。

その時、軽く占い師の手に触れてしまった。

何やら驚いた様子で一度、手を引いた日当に、真沙と永士は『すみません…』と、微妙な表情でカップを受け取る彼を見やる。

「何が困りごとがあるのね？　…じゃぁ、後でゆっくり相談に乗ってあげましょう。大丈夫よ。私になら時間は沢山あるから」

上品に笑う彼女の雰囲気はとても柔らかくて、初対面であるのだが、なぜかとてもリラックスすることが出来た。

「今日は遊びに来てくれてありがとう。…久しぶりね、こうして“遊び”に来てくれる人は」

「そうなんですか？」

と、真沙は笑うが、永士は複雑な笑みを向ける。

相手は占い師で、占いを仕事にしている。つまり、今は勤務時間中ということだ。…人はいないようだが。仕事の邪魔をしているんじゃないかと考えたところで、彼女は微笑む。

「気にしないで。占いは趣味みたいなものなの。…確かに、これでご飯を食べてはいるけれどね。お仕事じゃないし、休みたい時だってあるわ。あぁ、そうだ。おいしいお菓子があるの。皆で食べましょう？」

まるで、すっかり友達のようだ。嬉しそうに笑みを浮かべて、奥からクッキーの詰め込まれた缶を持ってきた彼女に、真沙は単純に嬉しそうに『いいんですか！　やったー！』と、大はしゃぎだ。

そんな彼女の性格を羨ましいと思うと同時に、永士も嬉しくなってきて『やったね』と、真沙に声をかける。

日当はというと、そんな二人においてけぼりにされながらも、まるで保護者かのような笑みを浮かべる。そうして、占い師の女性と目があって、あぁ、と尋ねた。

「そういえば、お名前、伺ってませんでしたね」

初めの会話がスムーズ過ぎて、すっかり忘れてしまっていた。すると彼女も、『あら、そうね』と、口元を手で押さえる。

「私はれいか。よろしくね、ひなた君」

「あ、はい。よろしくお願いします」

あれ、こっちは名乗ってないんだけど。と、思いながらも、彼女は占い師なのだから、と、自分を納得させて頭を軽く下げる。

次にれいかは、『ようじ君と、まさちゃんもね』と、二人に笑みを向けた。彼女は何でも分かっているのだろう。

何でも、分かっているのか。

軽い恋占いや、学校でのことなど、他愛のない話しをしているうちに、すっかり時間が経ってしまった。もうお昼だ。

「あらまぁ…もうこんな時間。皆、お昼ご飯、ごちそうしてもいいかしら？　それとも、お家で誰か待っている？」

ここまできて、ようやっと真沙も悪い気がしてきたんだろう。お茶やお菓子をごちそうになった上に、昼食まで。

しかしながら、れいかはと言うと、学生三人の話を全く聞かずに、いそいそと昼食作りの準備を初めている。そして、いつもなら断るところだろうに、永士が『あ、手伝います』と言って、カウンターの中に入って行ってしまった。

強制的に断れない雰囲気になってしまっている。

まぁ、いっか。と、流れに任せる形で、真沙と日当は暇人同士、最近の映画なんかの話をし始めた。

それを聞きながら、れいかはオムライス用の卵をせっせと割っている永士に微笑んだ。

「ありがとうね」

「え？　あぁ、はい」

彼はきっと、手伝いに来てくれたことに対しての礼だと思ったろう。れいかはそう思いながらも、笑顔を崩さずに視線を手元に戻す。無意識に感が良い子はいるものだ。

れいかとしては、単純に、彼らを今、ここから返したくなかっただけ。具体的にどうという理由は分からないが、そんな予感がするのだ。

この感覚は肌に覚えがあって、れいかは、そっと後ろで話している真沙と日当を見やり、そして、卵をかき混ぜている永士も見やる。

嫌な予感はすれども、れいかにはどうにもできない類のものだろう。

「ようじ君。ちゃんと、まさちゃんの側にいてあげなくてはダメよ？　ふふ。お兄さん、ちょっと怖い人みたいだけれど」

「え！？　い、いえ！　まーちゃんのお兄さんは、確りした方ですよ！　こ、怖いだなんて…はい、怖いだなんて…」

「ダメねぇ。それじゃぁ、お兄さんは認めてくれないわよ？」

うふふ。と、世話焼きなおばさんの様に笑って見せるれいかに、永士はすこし落ち込んだ風に俯く。彼は少々優し過ぎて、気が弱くなっているところがある。

けれども、気が弱いからといって、精神的に弱いわけではないのだ。自己犠牲精神が人よりも強いが故に、他人の為に折れることが多いだけ。理由があれば、鉄壁の様に拒否することもできるだろう。

プライドというか、そういった物のハードルが低いのだ。

だが、それもれいかが気付いてやっているだけで、本人は気付いていない。だから、自分に自信を持てていない。よくある悪循環だ。

「まさちゃんは貴方のこと、ちゃんと頼ってくれてるでしょう？　それはとてもとても素敵なことよ。頑張ってね」

「は、はい…」

励まされていると受け取っておこう。と、卵の入ったボールを置く。本当に不思議な感じの人だと思った。今まで会ったことのない雰囲気の人だ。

人が不快にならない程度の場所までしか踏み込んでこない。

「そこの棚から、お皿、とってもらえるかしら？」

「あ、はい！」

そしてきっと、話を切り替えるのだって上手い人なんだろうなぁ。なんて思いながら、永士はれいかにお皿を渡した。

そうして、昼食であるオムライスも、全員でおいしく完食して、話に花を咲かせる。…これだけ長時間会話をしているのに、話のタネが尽きることもなく、誰一人、飽きることなく入れたのは、凄いことだ。

真沙なんて、しゃべり疲れた、といった様子で、日が沈みかけてオレンジに染まっている天窓に向かって両手を伸ばす。

「今日は楽しかったです！　また遊びに来ても良いですか？」

にこにこと笑顔で言う真沙に、れいかも笑顔で返す。

「えぇ。おいしいお菓子を用意して待ってるわね」

やったー！　と、笑い掛けられ、永士もにこりと笑う。

そうして、三人がそれぞれにお礼を口にして出て行こうとした時だ。

「ひなた君はもうちょっとだけ、時間をくれないかしら。五分ぐらいでいいから」

柔らかな雰囲気で引きとめられた日当を振り返り、既に店外に出てしまった真沙と永士は、外にあるベンチで日当を待つことにした。

すると、三分ほどで日当が店から出てきて、しかし、二人に向かって苦笑を浮かべて言った。

「ごめん、二人とも、先に帰っちゃっていいよ。ちょっと長くなるから…」

「そうですか？」

何か相談事があるんだろうと、さすがの真沙も察したのだろう。それほど深く追求せずに、日当に手を振って別れる。

いつもなら、駅で真沙と別れるのだが、永士はれいかに言われたことが少し気にかかって、彼女を家まで送っていくことにした。

真沙の側にいろ、というのが、こんな直接的で今すぐということ

だったのかは分からないが…後々、後悔するぐらいなら、行動したって構わないだろう。

「……あれ？」

と、真沙が呟くのと同じタイミングで、永士もそれに気が付いていた。彼女の家の門の前、男の人が中を覗く様にしていた。

そして、そんな男性に不信感を抱いている永士の目の前で、彼女は信じられない行動に出た。

「あのー！　私の家に何か用ですかぁっ？」

大きく手を振って、明らかに不審な男性に駆け寄って行ったのだ。

もう、猫を思わせるビビり具合で、永士は思わず真沙の腕を掴んで引きとめる。すると、男の方も、足早にそこから逃げて行ってしまった。

「あれぇ…？」

不思議そうに首を捻る真沙に、永士は珍しく眉を寄せた。

「まーちゃん、危ないよ。今の人が、その…悪い人だったらどうするのさ」

この言葉が出たのも、きっと、れいかが“側にいろ”と、さらっと、けれども念を押すように言ったからだろう。前々から少し警戒心がないとは思っていたのだが…。

「大丈夫だよ！　だってお兄ちゃんが守ってくれるから！」

なんて笑顔で言われてしまっては、返す言葉もないし…少しばかり傷付いた。が、真沙は更に続ける。

「それに、よーじ君だって、助けてくれるでしょ？　だから、私は安心していられるんだよ」

えへへ、と、未だに自分を掴んでいる永士の手を、自分の腕ごと前後に揺らす。

彼女とは長らく共にいて、もう、恋人と言っても良いぐらいの仲になっているが…ここまでストレートに、そういう意味合いを込めて、そういう言葉を言われたのは初めてなような気がした。

真沙の顔も赤みが差しているようだが、それよりも永士の顔が赤くなる。

「あ…うん。ありがとう…じゃぁ、僕、頑張るよ」

照れくさくなって、笑ってごまかしながら、永士は彼女が玄関を閉めるまで見届けていた。

そうして、道の向こうを見やる。

さっきの男は一体誰だったんだろう。…そして、今朝のこと。不思議なほど、すっかり忘れていたが、永士は聞いていた。部室で葉奏と相喜が話していたのを。

詳しくは聞こえなかったが、書恵がどうの、と言った話だった。

そういえば今日は姿を見ていないし…と、不安はぬぐい去れない。

明日、また学校に行って聞いてみよう。永士は鞄を背負い直し、駅に向かって歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2056e/

終わった後に…

2011年7月3日08時40分発行